

創立50周年記念誌

志

大阪府立東住吉高等学校





# CONTENTS

## 目次

- 1 巻頭言 挨拶と祝辞 .....P2  
校長 同窓会会長 P T A会長  
元校長 生徒会会長
- 2 第Ⅰ部 歴史と人々(通史)
  - 沿革概要 .....P8
  - 歴代校長 .....P10
  - 校旗・校章・校歌 .....P12
  - P T A .....P15
  - 緑友会(同窓会) .....P18
  - 多士済済—活躍されている先輩 .....P20
  - 回想録—同窓生 .....P36
- 3 第Ⅱ部 東住吉は今(現況)
  - 校舎・施設 .....P62
  - 授業風景 校内点描 .....P66
  - 教室配置 .....P71
  - 校務分掌 .....P72
  - 芸能文化科 .....P85
  - 職員紹介 .....P89
  - クラブ活動 .....P90
  - 生徒会 .....P101
  - 年間行事 .....P103
- 4 第Ⅲ部 座談会(将来展望) .....P104  
付・峰の青雲(生徒紹介)
- 5 資料編
  - 校舎変遷 .....P120
  - 体育祭・文化祭・修学旅行の変遷 .....P124
  - クラブ活動の記録 .....P131
  - 卒業生数変遷 .....P135
  - 教育課程変遷 .....P136
  - 卒業生進路 .....P140
  - (卒業)担任一覧 .....P142
  - 現旧職員一覧 .....P144
  - その他—学校近隣点描 .....P151
- 6 まとめ
  - 記念事業報告 .....P152
  - 編集後記 .....P153

題字 谷よしえ教諭

創立50周年記念誌

# 半世紀の歩み



平成16(2004)年

大阪府立東住吉高等学校



## 陽だまりのような学校

校長

村田 憲司

朝日をめざして登校し、夕日をめざして下校する。真西に向けて広く門を開いた私たちの学校はいつも、太陽と向き合って一日が営まれてきました。1万2000人にのぼる卒業生の皆様もそれぞれに高校生活の思い出の後景として、遠い記憶の片隅に春のやわらかい陽光、夏の焼けつく日差し、秋の穏やかな木漏れ日、冬の光の透明な輝きをそっとしまわれていることでしょうか。まだ戦争の余韻の残る昭和30年の創立から半世紀、大阪府立東住吉高等学校はこのようにして、清純で豊かな時を刻みつけてきました。

キャンパスを彩る樹木と草花、落ち着いたたたずまいを見せる校舎の連なり。生徒たちは授業に、部活動に、学校行事に、青春を謳歌しています。創立当時と比べて、日本の社会も教育制度も激しく移り変わりました。しかし、私たちの学校はいまでも、実に「高校らしい高校」として、かつて白鷺の野といわれた地にしっかりと存在感を示しています。卒業生の皆様が培われた、おらかな校風は脈々と生きつづけています。

校門をくぐると、すぐ右の木立の中に苔むした石碑があります。私は時折、その前に立ち、学校の来し方行く末を案じます。「たくましい自主創造の精神」の文字は初代校長、堀江駒太郎先生の揮毫。剛直な意志をうかがわせる、みごとな書です。思えば、たくましさも、自主性も、創造力も、決して古びることのない、人間にとって大切な能力であり、資質です。さらに言えば、厳しい経済情勢とめまぐるしく国際化が進む社会へ羽ばたいてゆく若者たちにとって、とりわけ必要な「生きる力」そのものといえます。新たな50年、私たちの学校は、このすばらしい校是を忘れることなく、一步一步、歴史と伝統を積み重ねていかなければなりません。そう考えると、身が引き締まります。

平成5年に創設された「芸能文化科」も12年目を迎え、本校の大きな特色として、大阪だけでなく全国の教育関係者に知られるようになりました。他府県からの見学も絶えません。学区の壁を越えて集まった生徒らは、古典芸能や伝統文化の真髄を

学び、教養豊かな社会人に巣立ってゆきます。少子化のあおりを受けて、府立高校はこれから生き残りを賭けた競争の時代に突入します。絶対に負けれない戦いです。卒業生の皆様から母校を託された私たちは、なんとしても「大阪府立東住吉高等学校」のネームバリューを守らなければなりません。そのために、本体の普通科においても知識偏重ではなく、「スポーツと芸術と学問」のバランスが取れた教育によって、知性と情操豊かな人間を育ててゆきます。

草創期の本校は、校長と生徒が一緒に昼食をとり、信州で学校キャンプをし、先生と生徒が合宿補習を行う、大家族のような親密な空気の漂う場でした。いま、それをそのまま復活させることはできませんが、そうした信頼感に満ちた陽だまりのような場所にすることは可能です。それこそが、先輩たちから私たちが受け継ぐべき仕事だと思えます。

最後になりましたが、変わることなく学校を支えつづけていただいた多くの保護者の皆様、「東住吉の教育」に尽力された多くの先生方、そして、

このたびの盛大な「創立50周年記念事業」にご助力をたまわりました皆様、浩瀚な記念誌の編纂にご協力いただいた皆様方に改めて、厚くお礼を申し上げます。これを機に、私たちの校章が象る「人」を育てることを高らかに掲げ、教職員一同、充実した高校教育に邁進することをお誓いして、筆を擱きます。

平成16年10月吉日

#### 〈異色校長〉

昭和22年、大阪市生まれ。大阪府立高津高等学校、京都大学法学部卒業後、映画助監督を経て産経新聞大阪本社に入社。社会部（教育担当など）、文化部記者を経て大阪本社文化部長、東京本社文化部長、編集局次長。平成14年退社。15年、公募民間人校長として大阪府立東住吉高等学校校長に就任。



## 創立50周年を 祝して

創立50周年記念事業実行委員長  
緑友会（同窓会）会長

辻 拓也

このたび、大阪府立東住吉高校が、創立50周年を迎えましたことを心からお祝い申し上げます。

顧みますと、1期生として卒業しました私たちの母校は、昭和30年4月に開校されました。当時は自分たちの校舎がなかったため、摂陽中学校の敷地の片隅に、トタン屋根のバラック建ての校舎で1年間を過ごし、ずいぶん肩身の狭い思いをしました。1年後に木造二階建ての自分たちの校舎が、現在の地に完成したときは、本当に心から嬉しく、感激しました。

先生方と生徒が一丸になり、運動場の石ころ拾いや草抜きに精を出し、我々が学校を創るんだという想いで一杯でした。又一方では体を鍛えなければ受験戦争にも勝てないということで、春の遠足は、河内長野駅より金剛山山頂までの往復を歩きました。朝礼は雨の日を除いて毎日ありました。また住居が学校より2キロメートル以内の者は、自転車通学禁止という規則が設けられて、この規則に不服の者は他校へ転校せよとの厳しいものでした。このように、何かにつけて鍛えられたものです。それが今になって本当によかったなあと思います。

母校の方は年々校舎も増え続け、プールや体育館や運動場も整備され、

今や威容を誇る母校に成長しました。昨年は芸能文化科の10周年記念式典も盛大に挙行され、母校の充実発展をみるまでになってきております。緑友会（同窓会）も今や2万1千有余名の大世帯になり、同窓生各位はそれぞれの分野で御活躍されていることと思います。今後も皆様方の御協力で、緑友会を益々発展させていきたいと考えております。

母校の創立50周年を機会に、全員で築いてきた伝統の上に、今後更に新たな伝統を築き積み上げ、「自主独立の精神」の教訓を念頭に入れ、現代社会のニーズに即した斬新な学校に発展していくことを、心から期待しております。

この創立50周年に当たり、記念式典、記念誌、記念事業等々に、学校側とPTAとみどり会と後援会とそして緑友会とが一体となって進めてまいりました。関係諸氏の皆様の多大な御協力、御支援をいただきましたことを、ここに厚く御礼申し上げます。最後に校長先生はじめ、教職員の皆様、PTAの皆様、みどり会と後援会と緑友会の皆様、生徒の皆様の方々の今後の益々の御活躍と御多幸を、心より祈念しましてお祝いのことはとさせていただきます。

昭和30年、15歳の少年少女たちは、今、65歳という円熟のときを迎えておられます。その円熟の歴史とともに刻み込まれた50年の輝き、伝統、そして歴史。その東住吉高等学校の創立50年に立ち会うことが出来た光栄を全身に感じ、感謝し、同時に祝福したいと心から思います。

奇しくも、自身も50歳という齢を迎え、50年という時間の重さをひしひしと感じる今年に、愛する東住吉高等学校の50年の誕生日を同じく迎えること、本当に喜ばしく思っております。半世紀というひとつの区切りの中で、古きを訪ね、新しきを知る。そして、次の10年、50年への継続を熱望しています。

PTA会長として、3年間「在籍」いたしました。同時に、ご存知の通り、ラグビー部のコーチとしてもお世話になりました。初年度、1回戦敗退のチームも、今年の春の大会では、大阪府下3位の好成績を取めました。コーチとしての夢は、これからの我が校、我が部において、いつか、卒業生が教員として母校に還ってきて顧問となり、何年か後に全国大会に出場する。そして、何度かの出場後に全国優勝を果す。これが壮大で、決して不可能ではない私の「夢」なのです。

目標が無ければ、つまり行先が決まらなければ、その道が正しいのか

どうか分かりません。それにはまず、目標点（夢とか目的）を定めて、それに向けての方法論（手段や日程等）を決めていく、その後は、継続する力と信じる力です。いつかは優勝するんだという目標に向かって、新しい技術やトレーニング法を取り入れ、仲間と自分を信じる事が出来れば、きっと夢は叶います。東住吉高等学校ラグビー部も、そう遠くない将来に、必ず全国制覇を果すでしょう。

私が、今、50歳の情熱でこのグラウンドに立ったとき、その先に見えるのは、我が部の全国制覇なのです。その思いを、継続していくこと、それを改めて心に誓うことを確かめる、それがこの50周年ではないのかなと思います。

我が校も、民間人登用によって、村田憲司校長先生が着任され、新しい風が吹き始めました。息吹きというものではないでしょうか。この息吹を大きく育てて、うねりとし、大きなエネルギーとして、ますます素晴らしい東住吉高等学校に羽ばたくことを、心から願い、そして、いつの日か、一人一人の夢が必ず叶いますようエールを送り、私自身も夢を追いかけていこうと決意した次第です。

次の100周年を見つめて、頑張りましょう！



## 夢、息吹、そして

PTA会長

橋本 道雄

創立50周年誠にめでたうございます。私が緑豊かで落ち着いたキャンパスの東住吉高校に赴任した平成6年は、創立40周年の年で、あれからもう10年になるのかと、あらためて歳月の経過の早さに驚かされます。

校長として、平成10年の春まで4年間在職しましたが、その間にさまざまな貴重な体験をさせていただきました。たとえば桂三枝氏や西川きよし氏など、芸能関係の著名な方々の来校がたくさんありました。生徒たちへの講演の前後に、校長室で時間の許されるかぎりお話を伺いました。普段はテレビなどを通じてしかお目にかかれない方々と、直接お会いして話をしましたが、どの方も本当に魅力的で素晴らしい皆さんでした。強烈な印象を受けたものでした。

創立40周年記念のほかにも、芸能文科棟竣工記念式典などの行事も多く、新米校長として緊張の連続でした。そのような中で式典にいられた中川和雄府知事から、「立場は変わるけれども和雄同士、互いに頑張りましょう。」と励ましの言葉をいただいたのも、嬉しい思い出となりました。

芸能文化科が設立された当初の数期間は、テレビなどでも再三紹介さ

れ、世間でその存在が認知されるにしたがって、学校への視察もうなぎのぼりになりました。国会議員、府会議員、高校や中学校の校長会の方々、さらには外国からの教育視察団など枚挙にいとまがありませんでした。もとより東住吉高校は歴史と伝統のある普通科の高校ですが、それに歩み始めたばかりの芸能文化科が全国唯一の存在であるだけに、そちらに照明のあてられることが多かったようです。

また一方、私が外部でお話させていただくことも度々でした。全国及び近隣の校長会などの席で、東住吉高校紹介のような話をしました。特に地元中学校の校長先生には、「芸能文化科については、他人に説明できるほどまでよく知っていただきたい」との思いから第7学区中高連絡協議会の設置を提案して、中高の連携を強めたのも懐かしい思い出です。芸能文化科の成長と東住吉高校の進展が私を校長に育ててくれたようでした。

創立50周年を一つの節目として、東住吉高校がますます魅力と活気のある高校にさらに充実発展されるよう祈念します。



## 創立50周年に 寄せて

第10代校長

大黒 和雄



## 未来の東住吉生へ

生徒会会長

山下 ひかり

今年で創立50周年を迎える東住吉高校。私たち48期生が生まれるずっとずっと前にできた高校。1期生の先輩方は65歳になっておられるだろう。そして私たちが65歳になった時の東住吉生は、現在まだ生まれてもいない子たち。50年後には、きっとその子たちが、今私たちが使っている教室や運動場や体育館で、授業を受けたりクラブ活動をしているだろう。その時には、今の私たちの高校生活が過去になる。なんだか寂しい気がする。だから私たちがここにいたことを記し、まだ顔も知らない未来の東住吉生へ言葉を届けたい。

ヒガスミの最大のイベントはやっぱり体育祭。赤団、蒼団、白団、緑団に分かれ、スタンド、マスコット、アトラク、応援を全団あげて競い合う。応援は50年もの伝統のある各団の型を演技する。型はずっと同じものを受け継いでいる。これぞ伝統！だけどやっぱり大変。団の中でもめ事も生まれるし、涙をみることもあった。でも体育祭の本番には全団が最高のものを仕上げ、終わったときにはみんなが感動して、涙を流した。一度同じ団になった友達とは、一生友達でいられるような気がする。それくらい私たちにとって体育祭は大きいものである。

そして、いつの間にか大好きな先輩達がいなくなったと感じはじめたら、もう受験生になっている。本当

にここまでの時間は「あっ！」という間だった。なんでこんなに毎日が楽しく、早く過ぎるんだろう…？ それはやっぱり友達がいるから。どこにいても、どんな時でも、みんながいるから楽しい。そりゃ言い合いもケンカもするし、時には涙が出たりする。そんな時でもやっぱりそばにいてくれるのは友達で…。しばらくすると笑い声がし、一緒に馬鹿なことをして喜んだりもする。多分その時が一番幸せなんだろうなあ。ずっとずっと大切にしたい。みんなを…。

ヒガスミを選び、入学し、高校生活を楽しく過ごしていることは、私にとって誇りである。ほとんどの人が「ヒガスミに来てよかった。」と思っているだろう。これからもこのヒガスミのいい所、伝統を受け継いでいってほしい。未来の東住吉生のみなさん、お願いします。

最後に、東住吉生でいられるのはたったの3年間。絶対に後悔のないように、一人一人が思いっきり青春してほしい。そうすれば本当に、一生心に残る思い出が、数え切れないほどいっぱいできるだろうから。かつての先輩方や、そして、私たちのように。

# 沿革概要

## 1952年(昭和27年)

3月1日 東住吉地区高等学校建設委員会創立

## 1955年(昭和30年)

3月16日 大阪府立東住吉高等学校と称し創立、  
府立佐野高等学校長 堀江駒太郎創立  
事務取扱を命ぜられ、事務所を府立  
天王寺高等学校内に置く

3月24日 事務所を大阪市立摂陽中学校(平野  
区平野西3-4-7)内に移転する

4月1日 校長堀江駒太郎以下職員15名任命

4月8日 入学式

9月1日 校地整地作業開始

12月10日 地鎮祭 第一期工事開始

## 1956年(昭和31年)

3月31日 第一期工事竣工(木造二階建西半分  
8室)

4月5日 新校舎(平野区平野西2-3-77)に移転

4月9日 入学式

## 1957年(昭和32年)

3月15日 第二期工事竣工(鉄筋三階建本館東  
半分)

4月8日 入学式

10月2日 校歌発表

10月13日 創立3周年記念式典

## 1958年(昭和33年)

2月 第一回卒業式

3月 第三期工事竣工(木造二階建東半分  
6室、鉄筋二階建理科教室、準備室)

## 1959年(昭和34年)

1月 第4期工事竣工(鉄筋2階建家庭科  
室、準備室)

2月 第1回校地拡張(1670平方米)

2月 第2回卒業式

## 1960年(昭和35年)

2月 第3回卒業式

3月 第5期工事竣工(鉄筋三階建本館西  
半分、音楽教室、体育館)

8月 みどり会(PTA OBの有志)結成

10月 水泳プール竣工

## 1961年(昭和36年)

2月 第4回卒業式

3月 第6期工事竣工(柔道場、自転車置  
場、クラブ部室)

## 1962年(昭和37年)

1月 第2回校地拡張(2262平方米)

2月 第5回卒業式

12月 緑友会館一階(食堂)竣工

## 1963年(昭和38年)

1月 緑友会館 落成式

2月 第6回卒業式

2月 新校舎(急増対策)竣工

## 1964年(昭和39年)

2月 第7回卒業式

12月 更衣室並渡廊下増築工事竣工

## 1965年(昭和40年)

2月 第8回卒業式

3月 緑友会館増築工事竣工

## 1966年(昭和41年)

2月 第9回卒業式

## 1967年(昭和42年)

2月 第10回卒業式

3月 学校南西隅三角地買収

## 1968年(昭和43年)

2月 第11回卒業式

## 1969年(昭和44年)

2月 第12回卒業式

6月 放送室等竣工

## 1970年(昭和45年)

2月 第13回卒業式

## 1971年(昭和46年)

2月 第14回卒業式

3月 図書館並視聴覚室竣工

## 1972年(昭和47年)

2月 第15回卒業式

## 1973年(昭和48年)

2月 第16回卒業式

9月 新講義室竣工

## 1974年(昭和49年)

2月 第17回卒業式

## 1975年(昭和50年)

2月 第18回卒業式

## 1976年(昭和51年)

2月 第19回卒業式

## 1977年(昭和52年)

2月 第20回卒業式

|                     |                           |                     |                            |
|---------------------|---------------------------|---------------------|----------------------------|
| <b>1978年(昭和53年)</b> |                           | <b>1994年(平成6年)</b>  |                            |
| 2月                  | 第21回卒業式                   | 2月                  | 第37回卒業式                    |
| 7月                  | 東館増築工事竣工                  | 3月                  | 芸能文化科実習棟竣工                 |
| 9月                  | 木造校舎鉄筋化工事着工               | 6月                  | 芸能文化科実習棟落成記念式典             |
| <b>1979年(昭和54年)</b> |                           | 10月                 | 創立40周年記念式典                 |
| 2月                  | 第22回卒業式                   | <b>1995年(平成7年)</b>  |                            |
| 10月                 | 創立25周年記念式典                | 2月                  | 第38回卒業式                    |
| <b>1980年(昭和55年)</b> |                           | <b>1996年(平成8年)</b>  |                            |
| 2月                  | 第23回卒業式                   | 2月                  | 第39回卒業式                    |
| 3月                  | 体育館撤去、新南館撤去               | <b>1997年(平成9年)</b>  |                            |
| 9月                  | 中央館竣工                     | 2月                  | 第40回卒業式                    |
| <b>1981年(昭和56年)</b> |                           | <b>1998年(平成10年)</b> |                            |
| 2月                  | 第24回卒業式                   | 2月                  | 第41回卒業式                    |
| 3月                  | 新体育館竣工                    | <b>1999年(平成11年)</b> |                            |
| <b>1982年(昭和57年)</b> |                           | 2月                  | 第42回卒業式                    |
| 2月                  | 第25回卒業式                   | <b>2000年(平成12年)</b> |                            |
| <b>1983年(昭和58年)</b> |                           | 2月                  | 第43回卒業式                    |
| 2月                  | 第26回卒業式                   | <b>2001年(平成13年)</b> |                            |
| <b>1984年(昭和59年)</b> |                           | 2月                  | 第44回卒業式                    |
| 2月                  | 第27回卒業式                   | 8月                  | 中央館H R教室空調機設置(寄付)          |
| 11月                 | 緑友会館二、三階内部改修工事完成          | 9月                  | 北館、南館、西館外壁改修工事竣工           |
| <b>1985年(昭和60年)</b> |                           | <b>2002年(平成14年)</b> |                            |
| 2月                  | 第28回卒業式                   | 2月                  | 第45回卒業式                    |
| <b>1986年(昭和61年)</b> |                           | 3月                  | 緑友会館外壁改修工事竣工               |
| 2月                  | 第29回卒業式                   | 10月                 | 芸能文化科創設10周年記念式典            |
| <b>1987年(昭和62年)</b> |                           | <b>2003年(平成15年)</b> |                            |
| 2月                  | 第30回卒業式                   | 2月                  | 第46回卒業式                    |
| <b>1988年(昭和63年)</b> |                           | 3月                  | 福祉整備(身体障害者用便所等)工事竣工        |
| 2月                  | 第31回卒業式                   | 6月                  | 家庭科調理教室空調機設置(寄付)           |
| <b>1989年(平成元年)</b>  |                           | 8月                  | 普通教室空調機設置工事完了(平成16年6月供用開始) |
| 2月                  | 第32回卒業式                   | <b>2004年(平成16年)</b> |                            |
| <b>1990年(平成2年)</b>  |                           | 2月                  | 体育館外壁等改修工事竣工               |
| 2月                  | 第33回卒業式                   | 2月                  | 第47回卒業式                    |
| <b>1991年(平成3年)</b>  |                           |                     |                            |
| 2月                  | 第34回卒業式                   |                     |                            |
| 7月                  | 新水泳プール着工                  |                     |                            |
| <b>1992年(平成4年)</b>  |                           |                     |                            |
| 2月                  | 第35回卒業式                   |                     |                            |
| 3月                  | 新水泳プール竣工                  |                     |                            |
| <b>1993年(平成5年)</b>  |                           |                     |                            |
| 2月                  | 第36回卒業式                   |                     |                            |
| 4月                  | 全国初「芸能文化科」設置 芸能文化科生徒40名入学 |                     |                            |

# 歴代校長



初代  
堀江駒太郎  
昭和30年3月16日より  
昭和37年3月31日まで



2代校長  
葭原 泰雄  
昭和37年4月 1日より  
昭和42年3月31日まで



3代校長  
齊藤 貫  
昭和42年4月 1日より  
昭和45年3月31日まで



4代校長  
高木 隆  
昭和45年4月 1日より  
昭和48年3月31日まで



5代校長  
菊池 通夫  
昭和48年4月 1日より  
昭和54年3月31日まで



6代校長  
北辻 要  
昭和54年4月 1日より  
昭和58年3月31日まで



7代校長  
亀田 弘  
昭和58年4月 1日より  
昭和61年3月31日まで



8代校長  
山本 登  
昭和61年4月 1日より  
平成 元年3月31日まで



9代校長  
中田 哲史  
平成 元年4月 1日より  
平成 6年3月31日まで



10代校長  
大黒 和雄  
平成 6年4月 1日より  
平成10年 3月31日まで



11代校長  
久保 貞夫  
平成10年 4月 1日より  
平成14年 3月31日まで



12代校長  
仲 慶謚  
平成14年 4月 1日より  
平成15年 2月 6日まで



13代校長  
成山 治彦  
平成15年 2月 7日より  
平成15年 3月31日まで



14代校長  
村田 憲司  
平成15年 4月 1日より

## 仲 慶 謚 元校長

仲 慶謚元校長は今回の50周年記念を誰よりも楽しみにされておられました。本校社会科教諭の時から芸能文化科の創設に尽力され、本校教頭を経て12代校長に就任されました。記念行事についても、教頭の頃から細かい配慮をされておりましたが、これからという時、一昨年夏に急逝されました。さぞかし心残りなことだったと改めて思われます。

この記念誌を仲先生の御霊のもとにも捧げたく思います。



## 新たなる一步 ～芸能文化科10周年を迎えて～

大阪府立東住吉高等学校

校長 仲 慶 謚

平成5年4月、府立東住吉高等学校に産声をあげた芸能文化科が設立10周年を迎えたことは感無量です。日本で唯一の芸能文化科は、この10年間パイロット校としての役割を十二分に果たしてまいりました。芸能文化科が設置された目的の一つが「偏差値教育から個性尊重」、「高校生としての基本的な学習を行い」、「芸能に関する専門科目を学び、調和のとれた健全な人格の育成」であります。この教育目的は、今では当たり前なこととして受け止められますが、当時としては非常に斬新なものでありました。

私は芸能文化科設置当時、学科長として学科の運営に関わってきました。どこにも例のない学科だけに、「とてつもなく大きな応用問題を与えられた」と自分に言い聞かせつつも、試行錯誤の連続でした。しかし、特別非常勤講師の先生方を始め、芸能各界、関係諸機関の方々に支えられながらの楽しい《作業》でもありました。こうした方々の支援がなければ、この芸能文化科は成立しなかったと言っても過言ではありません。

芸能文化科は、1クラスわずか40名の小さな学科ですが、本格的な実習棟を備え、多彩な講師陣に支えられたこの学科は、まさに「日本一小さな贅沢な学科」と言っても過言ではないでしょう。15歳から18歳までの年齢、つまり高校生の時代にこうした多彩な講師陣から直接授業を受けられるのは、長い人生の間にそう何度もあるものではありません。

芸能文化科の生徒たちは、《出会い》を大切に、専門教科の授業を受けながら「表現力」、「創造力」、「判断力」、「思考力」を学びとっています。

この10年間、芸能文化科はさまざまな取り組みをしてきました。落語・狂言の夏期合宿練習、吉本興業でのNGK見学と芸人さんとの懇談会、さらには小学校との連携、地域寄席へのボランティア、中学校教員対象の邦楽（三味線）授業等々数え上げれば切りがありません。こうした10年間の軌跡はこの記念誌に年表の形で掲載されています。ページをめくりながら芸能文化科が歩んで来た道を今一度思いおこしていただければ幸いです。

芸能文化科は、この10年を総括し、さらに飛躍発展をしていかなければなりません。今その新たなる第一歩が始まろうとしています。

「学科設置十周年記念誌（平成14年）」より

## 教育方針

教養ゆたかな、たくましい自主独立の精神に富んだ人間の育成をめざし、あらゆる機会に鍛錬し、学習指導、進路指導、保健指導などの徹底に力を注ぐと共に環境の整備により、ゆたかな情操がはぐくまれるよう努める。

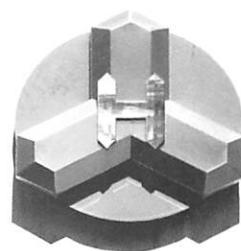
## 本校の象徴

- 1 緑 (school color)  
希望を示す
- 2 公孫樹 (school tree)  
知性を示す
- 3 薔薇 (school flower)  
友愛を示す

### 校旗



### 校章



校章レリーフ  
北館・中央館渡り廊下壁面に設置  
(第39期生卒業記念品)

## 校旗について

本校創立3周年記念事業の一環として、PTAの好意が校旗を制定した。

地色は本校のシンボルとして定めたグリーン（希望）とし、中央には創立当初府の指導主事富田氏が工夫考案してくれた校章を染め出した。校章は人間教育の理想を象徴すると共に本校のはるか東方山上にまつられている信貴山の毘沙門天の紋に似せてある。則ち仏教の信仰による知恵の

神の紋に通じている。勉学を通じて知性豊かな人間を養成したいとの創業の精神の一端を表わしたものである。

私共は本校に学ぶ若い人々が希望に燃えて勉学にいそしみ、知性豊かな人間として、すこやかに成長せられることを心から祈っている。

(この文章は初代校長堀江駒太郎先生のものである。)

## 校章の由来

校章は単なる記号ではなく、その形態と校風に共通な支配力がはたらき、簡潔さは現代的聡明さを表わし、しかもそこに独自性が必要だろう。そのような意味から一般に校名やその土地の由緒と関連づけられたものが多いが、さて本校の校章はどうだろう。一見して変化が少なく簡潔で中心に英文字Hの入った所はちょっとモダンな形をしているが、基礎になっているのが人間教育に邁進するという意味で人の形をなしている。人という字は単純な一本調子でなく、三つの大きな方向を持っている。その上細部ではそれぞれ違った面を持っているが、勿論それらが秩序ある結合を持たねばならない。これは一人の人間の場合もまた人間の社会としても同等である。この基盤の上にHを中心に乗せ統合が強められている。Hはヒト、ヒューマン、東住吉、本当の教育、ハイスクール等の頭文字から来ている。

奇縁というか、人を基盤としたこの形が毘沙門の紋所に似ている。仏法守護の神部に四天王という、いわば才腕兼備の実力大将がいる。毘沙門はその随一で別名を多聞とも言う。この博識と実践の威徳は殊に優れ四方に普く聞こえわたる。特に東の守りを固めているこの毘沙門さまが守られているのが信貴山で、その開山みょうれんさんは宇治拾遺や絵巻物で卓抜な名僧知識振りを発揮して今日もあがめられている。わが校は間近にこの信貴山を仰ぎ見て、日夜この現世利益をなんらかの形で受け、また守ってもらうことが出来ればありがたいことである。

(この文章は本校校章考案者、大阪府教育委員会指導主事、富田民治氏のものである。)

## 校歌について

「薔薇は清純」という麗辞が私の内部で結晶を遂げた刹那、わが東住吉高校校歌の姿勢がちどころに決定いたしました。

5月20日のさわやかな朝のことで、去年のくれにはじめて私が学園を訪れて、親しく校風をまのあたりにしてから半年に近い光陰が流れたことは諸君のすでに御承知の通りで、校長先生はじめ、諸先生、又当日お目にかかって校歌についての希望や意見を交換した生徒会の代表の諸君は、さぞかしこんどの校歌の完成を待ちわびていらしたこととお察しいたします。

しかし、一見空に費やされたと思われるこの時間は、5節3章より成るこんどの作品のモチーフとなった「薔薇は清純」の7音のクリスタリゼーションのために傾けられた

と申してよろしいでしょう。

それにしても、作者の自由にたっぷり時間を籍して下さり、その間私の疎懶を一言も責められなかった御関係者諸君の寛容な精神に対しては深く敬意と謝意を表する所以であります。

なお、この度の作品の特徴は、すべての章節を尽く体言止めにした点でこれは東住吉高校が、堅い精神基盤の上に立って高い理想の世界を志向する止みがたいすがたを具象したもので、諸君が勇氣と自信を以て、清く明るく力強くこの校歌を高唱することによって、校風を永遠に高昇して頂ければ作者にとって望外の光栄であります。

(作者のことば)

# 校歌

## 東住吉高等学校校歌

どくつとこもじしん  
 かぜにしいらのこが  
 えいらのしんはたにんご  
 ひがしやみよしこうがっこう

### 東住吉高等学校校歌

安西 冬衛

作詞

野口源次郎

作曲

一 風きよし 銀杏の木陰

英知の門に 晴れたり金剛

独立夙に誇る 自主の精神

仰げわが友 峰の青雲

東住吉高等学校

二 道ながし 漆の堤

真理の窓に 栄あり平等

好學今に伝う 不朽の精神

通えわが友 星は永遠

東住吉高等学校

三 草わかし みどりのつどい

希望の庭に 幸あり青春

共学恒に讃う 自由の精神

香れわが友 薔薇は清純

東住吉高等学校

# PTA

昭和30年度の片岡善四郎初代会長以来、数えて、橋本道雄現会長は36代目となります。開校当初の校地整備問題、37年から40年にかけての緑友会館建設と増築問題など、その時々大きな問題が、当時の役員諸氏のご努力により解決されてまいりました。当然のことながら、学校50年の歩みは、本会50年の歩みでもあります。

落ちついた雰囲気の学校となった今日、開校初期のころのような大問題を現在のPTAは抱えてはおりません。しかし子供たちのよりよい教育環境を目指して活動をおこなっている点は、昔も今も変わらない姿勢です。

近年に始まった取り組みとしては、

・平成12年から始まった「高校生オーストラリア語学研修」を応援しています。

・PTA新聞は平成2年の第1号以来、年1回の発行ペースで、この秋には第15号を発行する予定です。

また、昨年度に発足した「ヒガスマ・カルチャー・NPO」に対して本会が積極的に係わっていかうとしているのは、本会規約第3条第5項「地域における社会教育の振興に寄与する」という会の目的に合致しているからであります。

資料として、ここ10年間の役員等一覧と、社会見学会の訪問先一覧を記録に残します。



PTA大学見学会（平成14年度）

## ここ10年の社会見学訪問先

|       |                                   |
|-------|-----------------------------------|
| 平成5年度 | 河内長野で落語鑑賞会<br>(芸能文化科が設置された年だったので) |
| 6     | 京都西山・松尾                           |
| 7     | 和歌山・海南                            |
| 8     | 龍野市・赤穂市                           |
| 9     | 御在所岳・亀山                           |
| 10    | 淡路島                               |
| 11    | 若狭湾                               |
| 12    | 石山寺・信楽                            |
| 13    | 洞川・大峰                             |
| 14    | 神戸港                               |
| 15    | 天の橋立                              |



みどり会・PTA合同社会見学会（平成15年度）

# PTA役員

## 平成7年度 P T A 役員等

会 長 森永 敦美  
副 会 長 松井 克之  
副 会 長 長尾 絹枝  
書 記 水阪紀代子  
会 計 松本 一茂  
監査委員長 桑原 知子  
監 査 委 員 北川真知子  
監 査 委 員 前田 睦子

## 平成8年度 P T A 役員等

会 長 松本 一茂  
副 会 長 桑原 知子  
副 会 長 妹尾 興一  
書 記 前田 睦子  
会 計 岡本 恵子  
監査委員長 多田美恵子  
監 査 委 員 野口 秀樹  
監 査 委 員 後藤 泰子

## 平成9年度 P T A 役員等

会 長 松本 一茂  
副 会 長 桑原 知子  
副 会 長 妹尾 興一  
書 記 前田 睦子  
会 計 金森 崇  
監査委員長 三浦 邦行  
監 査 委 員 和田野美代  
監 査 委 員 田中 保子  
監 査 委 員 井上 督三

## 平成10年度 P T A 役員等

会 長 井上 督三  
副 会 長 三浦 邦行  
副 会 長 和田野美代  
書 記 田中 保子  
会 計 金森 崇  
監査委員長 後藤 俊江  
監 査 委 員 長谷川とみ江  
監 査 委 員 分部 悦子  
監 査 委 員 小野田笑津子

## 平成11年度 P T A 役員等

会 長 東新 秀春  
副 会 長 三浦 邦行  
副 会 長 後藤 俊江  
書 記 分部 悦子  
会 計 長谷川とみ江  
監査委員長 友永喜久子  
監 査 委 員 戸田 治男  
監 査 委 員 岡 実千代  
監 査 委 員 林口美和子

## 平成12年度 P T A 役員等

会 長 東新 秀春  
副 会 長 戸田 治男  
副 会 長 長谷川とみ江  
書 記 分部 悦子  
会 計 岡 実千代  
監査委員長 脇田みどり  
監 査 委 員 石川 頼子  
監 査 委 員 松井 朝子  
監 査 委 員 山本 千草  
監 査 委 員 三好真由美

## 平成13年度 P T A 役員等

会 長 東新 秀春  
副 会 長 戸田 治男  
副 会 長 松井 ゆり  
書 記 石川 頼子  
会 計 前田登代子  
監査委員長 山本 千草  
監 査 委 員 三好真由美  
監 査 委 員 吉田 清子  
監 査 委 員 菊田千鶴子  
監 査 委 員 相木 順子

## 平成14年度 P T A 役員等

会 長 橋本 道雄  
副 会 長 吉田 清子  
副 会 長 山本 千草  
書 記 三好真由美  
会 計 相木 順子  
監査委員長 石川 頼子  
監 査 委 員 菊田千鶴子  
監 査 委 員 松岡枝理子  
監 査 委 員 鹿島 瑞江  
監 査 委 員 川村 加代

## 平成15年度 P T A 役員等

会 長 橋本 道雄  
副 会 長 吉田 幸三  
副 会 長 相木 順子  
書 記 山内 正美  
会 計 松岡枝理子  
監査委員長 川村 加代  
監 査 委 員 鹿島 瑞江  
監 査 委 員 藤井 啓子  
監 査 委 員 黒田英津子  
監 査 委 員 森園 花枝  
監 査 委 員 川谷さつき  
監 査 委 員 清水 一意  
監 査 委 員 山本 早苗

## 平成16年度 P T A 役員等

会 長 橋本 道雄  
副 会 長 清水 一意  
副 会 長 山内 正美  
書 記 黒田英津子  
会 計 山本 早苗  
監査委員長 川谷さつき  
監 査 委 員 川村 加代  
監 査 委 員 藤井 啓子  
監 査 委 員 田中伊津子  
監 査 委 員 溝口 弥生  
監 査 委 員 堀 久美

# みどり会 (PTA役員OB会)

東住吉高等学校みどり会は「私たちの子供が東住吉高等学校在学中と同様、卒業後もお互いの親睦を図るとともに、学校の発展に協力していきたい」という趣旨で設立されました。

本会は昭和35年の結成以来、PTAのOB会という基本的な位置づけとともに、学校並びにPTA組織に対する後援会的な性格も併せ持っていました。これは会則第2条に「本会は会員相互の親睦を図るとともに、学校教育の発展を願い、PTA活動に側面より協力することを目的とする」と記されていることから窺い知ることができます。また、体育館の緞帳幕やブラスバンド部の楽器などに、「みどり会」の名を見つけることができます。

しかし現在は、会をとりまく環境も変化し、純粋にPTAのOB親睦会的な活動に重点が置かれております。会則に従って開かれる毎年6月の総会・10月の親睦会・1月の新年会が、懐かしいお顔の集まる場となっております。

## 歴代みどり会会長

|         |       |       |       |
|---------|-------|-------|-------|
| 昭和35～47 | 樋口 治一 | 平成元   | 富田 宜達 |
| 48～51   | 浅井 賢次 | 2     | 平田 一雄 |
| 52      | 田中 政輔 | 3     | 倉木 勝美 |
| 53      | 赤鹿 義治 | 4     | 石田 博之 |
| 54      | 山田 裕三 | 5     | 中田 広志 |
| 55      | 豊田 静彦 | 6     | 木下 豊治 |
| 56      | 大沢 宏行 | 7     | 吉井 豊  |
| 57～60   | 石橋 昇  | 8     | 梅本 誠治 |
| 61      | 奥内 一男 | 9     | 森永 敦美 |
| 62      | 辻 拓也  | 10～11 | 松本 一茂 |
| 63      | 宮谷 雅之 | 12～13 | 井上 督三 |
|         |       | 14～16 | 東新 秀春 |

## 寄贈品



## 大阪府立東住吉高等学校後援会

本会は平成6年に、当時のPTA役員が発起人となり発足した会であります。“規約第3条”に記してありますが「東住吉高校の教育活動に寄与すること」を会の目的とし、事業は“第4条”に「教育活動の振興に必要な援助と、部活動の振興に必要な援助を行う」と規定しております。また、PTA新聞の紙面をお借りして会計報告を行っております。

具体的には新生の保護者様から、入学時に一度だけ規約に基づいた金額（一口3,000円）をご負担いただいております。無理に入会をお願いいたしてはおりませんが、毎春多くの保護者様にご入会をいただき、PTA組織を通じた援助では補えない面を支援させていただいております。

私たち保護者は、伝統あるこの学校がより一層発展するために微力を尽くしたいと思っております。合言葉は『ひそかに子供たちを支えたい』です。

後援会会長 吉井 豊

## 緑友会（同窓会）

### 緑友会のあゆみ

緑友会は1期生の卒業の年、昭和33年4月に発足しました。発足に当たり会長には学校長の故堀江駒太郎先生、副会長に1期生の津川雅洋氏が就任いたしました。会則などの骨子は故肥田耕也先生（同窓会顧問）が考えてくださいました。数年を経て、会長は現会長の辻 拓也氏（1期生）に引き継がれました。初期の頃の総会には先生方もほとんど参加して下さり、卒業生も先生方と会えることを楽しみに多数のみなさんが集まり、体育館に椅子を並べて行われ、最後には参加者がそろってフォークダンスなどを行い大いに盛り上がったものでした。その後、校舎改築などに伴い、総会の会場が体育館から食堂に移りました。また、学校の大きな行事である体育祭が二学期から一学期に変更され、総会の時期も少し前後しましたが、現在は6月最後の日曜日、食堂（緑友会館1階）で行っています。総会の日程にあわせて各期の同期会やクラス会、また、各クラブのOB会なども開催されています。今後とも多くの同窓生の参加を期待しています。

総会の会場となっています緑友会館は、昭和38年1月に落成式を行い、昭和40年には増築がなされました。当時は、1階は食堂、2階は美術教室、3階は書道教室に利用されていました。昭和50年代には、創立当時からの懐かしい木造校舎が鉄筋化のため改築されました。それに伴い、緑友会館に在った美術教室、書道教室が現在の場所に移りました。その後、緑友会25周年（昭和57年）当時から念願であった緑友会館2、3階の内部改修工事（昭和59年）が行われました。緑友会館2階は、緑友会の各種会合や在校生のクラブ合宿などの活用していくため、和室が大、中、小の3部屋作られました。3階は、緑友会事務局、緑友会関係の資料庫と20～30人程度の会議ができる会議室に改修しました。会議室には「緑友会」の額が掲げられ、貴重な資料や記念の品々を展示するスペースを確保しました。緑友会事務局には緑友会関係の資料など整備して行く環境が整いました。その後、2階の和室は、平成5年に全国初「芸能文化科」設置に伴い、芸能実習を行う教室として大いに活用されています。これからも、学校の教育活動の場として、また、同窓生の交流の場所として緑友会館が大いに活用さ

れることを期待しています。

緑友会事務局では、昭和40年頃、会員名簿の整理にパンチカードを用い、整理していました。その後の会員数の増加に伴い、昭和55年頃からは名簿業者に委託する形をとり、5年に1度の名簿を発行してまいりました。しかし、個人情報保護の観点から現在は、会員名簿の管理は事務局内部で行うようにしております。また、名簿の発行も平成9年の第9号から発行を控えており、現在その扱いを検討しております。また、会員の皆様に緑友会の活動や最近の母校の様子など少しでも情報を伝えるものとして、会報の充実にも努めて参りたく思っています。この会報も、緑友会25周年から毎年発行するように努めております。事務局では、今後とも内容の充実にも努めてまいりますので、会員の皆様の投稿を歓迎いたします。会員間の情報交換の場として近況報告や高校生時代の思い出などをお寄せください。現在会報の発行に関しましては、宛名のタックシール貼りなどに会員のボランティアをお願いしています。

緑友会から学校に寄贈したものとしては、緑友会館の改修費用（調度品を含む）の一部、緑友会館2階空調設備一式、合宿用洗濯機、図書館に世界遺産全集、体育設備としてトレーニングマシン一式及び3期生島崎 章氏からのトレーニングマシン寄贈に伴う付属品等費用一式、ウォータークーラー数台、40周年において泰山木の記念植樹、石碑等が代表的なものです。そのほかに、現役の生徒がクラブ活動で近畿大会などに出場した時の激励金や転出した先生方へのお饗別などがあります。

今年の3月47期生の新会員の皆様を迎え、緑友会は21,684名の会員を擁するようになりました。1期生は今年65歳になり、そろそろ第一線を退く方もおられます。しかし大半の会員の皆様は、現在社会の中でそれぞれの分野で活躍されています。時代は変わろうと高校時代はいつまでも懐かしいものです。一緒に学んだと友との交流に緑友会が何かのお役に立てれば幸いです。

緑友会役員名簿 平成16年4月

|      |            |    |             |      |             |
|------|------------|----|-------------|------|-------------|
| 名誉会長 | 村田 憲司      | 理事 | 中村 伸行 (12期) | 書記   | 前田 静男 (19期) |
| 会長   | 辻 拓也 (1期)  | 理事 | 兵庫 将夫 (13期) | 会計   | 吉田 正博 (1期)  |
| 副会長  | 塩谷 俊雄 (2期) | 理事 | 二杉 雄治 (13期) | 会計監査 | 井筒 安正 (3期)  |
| 副会長  | 能登 康宏 (3期) | 理事 | 浜村 茂 (13期)  | 会計監査 | 山上 哲郎 (5期)  |
| 副会長  | 飛地 勉 (8期)  | 理事 | 森下 健 (13期)  | 会報担当 | 喜多 啓二 (11期) |
| 理事   | 武田 透 (1期)  | 理事 | 林原 親多 (14期) | 校内   | 久下 英孝 (28期) |
| 理事   | 北川 吉平 (4期) | 理事 | 牧 文男 (15期)  |      |             |
| 理事   | 平井 文徳 (4期) | 理事 | 河内 節夫 (15期) |      |             |
| 理事   | 井上 保治 (8期) | 理事 | 梶 紳也 (19期)  |      |             |

常任幹事名簿 ( ) は旧姓

|     |             |     |             |     |       |
|-----|-------------|-----|-------------|-----|-------|
| 1期  | 後藤 武        | 15期 | 井村 喜一       | 27期 | 高橋 康和 |
| 2期  | 植田 (山崎) 重美  | 16期 | 元芳 (長沢) けい子 | 29期 | 塚谷 洋一 |
| 3期  | 井上 朗        | 16期 | 松田 泰典       | 30期 | 中津 寛子 |
| 3期  | 西埜 (樋口) 慶子  | 17期 | 仲川 太悦       | 31期 | 上田 哲生 |
| 4期  | 竹下 (田中) 貞子  | 17期 | 山田 哲央       | 31期 | 熊田千代子 |
| 4期  | 別府 宏之       | 18期 | 合羽 雅彦       | 32期 | 橋本 明  |
| 5期  | 本間 (古岡) 園子  | 18期 | 榎本 義幸       | 34期 | 石山 武  |
| 5期  | 北田 洋治       | 19期 | 橋 淳治        | 35期 | 白永 浩史 |
| 6期  | 大田 (山中) ひろみ | 19期 | 松田 康則       | 37期 | 長井由香利 |
| 6期  | 前田 勝敏       | 20期 | 平林 伸一       | 39期 | 黒田 幸博 |
| 7期  | 木下 (茶谷) 治子  | 20期 | 吉村 実        | 41期 | 榎本 未来 |
| 7期  | 本田 護        | 21期 | 藤本 (都築) 美恵子 | 42期 | 山本 龍太 |
| 8期  | 東 隆夫        | 21期 | 鉄 寿広        | 42期 | 本村志保真 |
| 9期  | 西内真次郎       | 22期 | 浅居 宏充       | 43期 | 植村 美希 |
| 9期  | 藤江 良一       | 22期 | 小幡 浩次       | 43期 | 中尾 万紀 |
| 10期 | 植田 耕作       | 23期 | 上野 敏治       | 44期 | 藤野 直城 |
| 10期 | 村上 和男       | 23期 | 木村真砂美       | 44期 | 阪倉 千慧 |
| 11期 | 竹綱 健一       | 23期 | 糸井 利則       | 45期 | 柳 友滋  |
| 12期 | 坂田 繁数 (藤井)  | 24期 | 福田 (古島) 美智子 | 45期 | 鈴木 啓仁 |
| 12期 | 岡村 次雄       | 24期 | 屋良 肇        | 46期 | 川脇 詳子 |
| 13期 | 廣野 均        | 25期 | 森本 義夫       | 46期 | 酒井 芳  |
| 13期 | 西川 加津枝 (西尾) | 25期 | 太田 (山口) 弥佐子 | 46期 | 平松 徹  |
| 14期 | 武林 茂樹       | 26期 | 山崎 民子       | 47期 | 藤野 翔  |
| 14期 | 別府 隆之       | 26期 | 山根 一公       | 47期 | 松本千賀子 |
| 15期 | 井辺 英雄       | 27期 | 三由 智実       |     |       |

半世紀を経て、ゆうに2万人を超える同窓生は、現在、社会の様々な分野で活動・活躍されています。今回は、東住吉高校のますます末広がりという気持ちで、学問・芸術・スポーツ・文化の分野から8人の方に登場していただきました。

## 人との出会い

第7期卒業生

河上 邦彦

KUNIHICO KAWAKAMI

東住吉高等学校での3年間の強烈な印象とか、強い思い出という物はあまりない。実に平凡に過ごしたと言うことであろうか。唯一自慢出来るというのは2年生の時、2・3年生合同の試験があり、歴史で2番の成績を取ったことぐらいか。それほどに歴史が好きで、社会科クラブに入っていたものの、部の方針が新しい時代をテーマにしていたので、古い時代が好きならにはあまり気乗りがしなかった。それでも部には女子もいたので、やむなく在部していたという不心得者であった。

大学は史学科を選び、考古学研究室を訪ねて出会ったのが末永雅雄先生である。大学時代は、学部・院を通じて、授業よりも研究室での作業や、野外での発掘に明け暮れ、最もひどい3年生の年には、正月から調査を計画したり、年間250日も発掘の現場にいた。おかげで、授業の成績は芳しくないのが当たり前である。そうしているうちに、末永先生から大学院へ行けと言われ、2年過ぎると今度はいきなり榎原研究所に行けと言われた。わずか10日で修士論文を書く羽目になったが、おかげで就職の心配をすること

もなく研究所に入り、気楽な日々を送っていたところ、再び突然先生から中国へ行けとのこと、留学である。もう妻も子もいたから単身である。泣く泣く、34歳にもなったの2年間の留学が決まったのであった。要は私の人生は先生の将棋の駒のようであったが、これほど楽なことはない。私は自分の研究を中心に考えておれば良かったからである。

先生の晩年の時、「おまえに形見をやる」と言われ、お伺いすると、文机をいただいた。裏に「日々新」と揮毫していただき、「この机で博士論文を書くように」とのことであった。その約束を果たせたのが四年後であった。先生が亡くなられた日、何か気になって連絡すると、たった今だった、とのこと、現場から先生のお宅にそのまま駆けつけた。この日からもう13年、先生が居られなくても何とかやってきたというのが今の気持ちだ。人生は人との出会いだが、どのような人に出会うかが重要だ。末永先生との出会いがなければ私の人生は違ったものになっていたと思う。



天皇皇后両陛下をお迎えして

(河上邦彦氏紹介)

1945年 大阪市生まれ

関西大学大学院終了 奈良県立橿原考古学研究所入所

1980年～1982年 北京語言学院、北京大学で研修

奈良県立橿原考古学研究所総括研究員を経て奈良県教育委員会文化財保存課主幹

現在

奈良県立橿原考古学研究所附属博物館館長、奈良県立橿原考古学研究所副所長

中国西北大学客員教授 中国社会科学院研究員 文学博士

高安城跡、飛鳥京跡、牧野古墳、束明神古墳、黒塚古墳など調査研究中

(著書・論文)

『古墳時代の研究』全13巻(共著編) 『考古学点描』 『発掘された古代の苑池』

『束明神古墳の研究』 『後・終末期の古墳の研究』 『飛鳥を掘る』 など多数

# 世界に植物の 自生地を訪ねて

第18期卒業生

土橋 豊

YUTAKA TSUCHIHASHI



皆さんお久しぶりです。

東住吉高校時代は、幼少の頃から生物が好きでしたので、生物部に籍を置いていました。自由な校風の中で、勉強やクラブ活動などに励むことができたことは、今も懐かしく、大切な思い出となっています。大学も生物系の学部を希望して、京都府立大学農学部農学科に進学し、卒業後は、京都大学農学研究科大学院の修士課程に進みました。大学、大学院を通じて野菜（トマトとメロン）を研究対象としていましたが、京都府に就職後は観賞植物を扱うことになり、京都府立植物園、京都府山城園芸研究所を経て、現在は京都府農業総合研究所に勤めています。今は農業振興を前提とした研究を行っているために、植物園時代のように野生植物を扱うことは少ないのですが、ライフワークのひとつとして野生植物の自生調査を個人的に行っています。貴重な遺伝資源としての野生植物が近年急激に絶滅の危機に瀕しており、体力とお金(?)が続く限り調査と現状報告を行いたいと思っています。

今までに最も印象的だったのは、ランの仲間、パフィオペディルム・アルメニアクムの自生地調査です。パフィオペディルム・アルメニアクムは、山脈を越えればミャンマーという、中国・雲南省の最西部の秘境、サルウィン川(中国名：怒江)溪谷の限られた地域に自生しています。

自生地としては、これまでに六庫および保山で確認されています。いずれもサルウィン川の東で、メコン川とサルウィン川に挟まれたごく限られた地域の標高1400~2400m付近にのみ自生していると考えられています。自生地が極めて辺境な地域であるため、中国の植物学者以外で自生地を確認した植物関係者としては、ごく限られており、当然、日本人では例がなく、その情報も限られています。そこで、1999年4月、六庫を基地として、自生地の調査を行い、かなり危険な目に遭いながらもようやく匹河にある某山(自生地保護のため非公開)の標高1850m付近で発見することができました(写真1)。ほとんど情報がない中、写真を現地の人に見せながら聞き回り、ようやく発見できたので感無量でした。

昨年(2003年)10月には、オーストラリアの西オーストラリア調査に出かけ、山火事後の1シーズンのみ開花する絶滅危惧種のランの仲間、ディウリス・パーディエイ(写真2)をやはり日本人として初めて観察できることに成功しました。

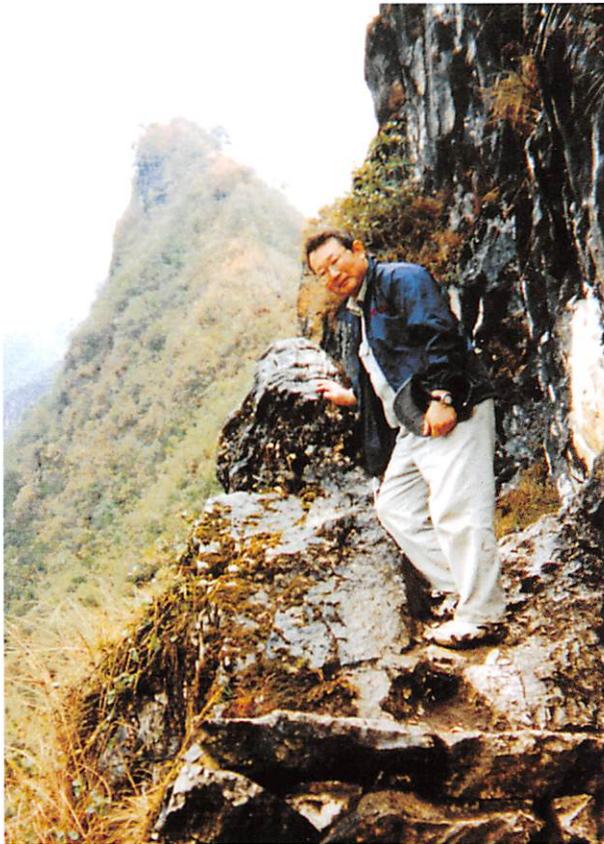
また、花卉園芸学の第一人者、塚本洋太郎先生(京都大学名誉教授)に大学院時代から目をかけていただき、執筆活動にも関わることができました。プロフィールにも紹介していますが、最初の拙著『検索入門観葉植物』(保育社)は、29才の時に出版できたものです。また、『ビジュアル園芸・植物用語事典』(家の光協会)は、多数の大学や専門学校教科書として採用されています。皆さんにも、図書館などでご覧いただければ幸いです。

今後とも、東住吉高校の卒業生として恥ずかしくないように、園芸界の発展のために頑張っていこうと思っています。在校生の皆さんも目標を高く持って励んでください。



ディウリス・パーディエイ（オーストラリア・西オーストラリア州パース近郊にて）

写真2



（土橋豊氏紹介）

1957年、大阪市生まれ。1979年、京都府立大学農学部卒業。1981年、京都大学大学院農学研究科修了後、京都府立植物園に勤務。同植物園温室係長などを経て、現在は京都府立農業総合研究所主任研究員。花卉園芸学専攻。ライフワークとして、世界の園芸事情や自生地の調査も精力的に行っている。園芸界若手の研鑽の場と、園芸文化の発展に寄与するために設立された「園芸研究会」の代表を務める。

主な著者として、『検索入門観葉植物①、②』（保育社）、『観葉植物 1000』（八坂書房）、『洋ラン図鑑』（光村推古書院）、『洋ラン』（山と溪谷社）、『ビジュアル園芸・植物用語事典』（家の光協会）、『熱帯の有用果実』（トンボ出版）、『カラー・ガーデニング レッド&ピンク』（光村推古書院）など。児童用の学習図鑑に『トロピカルフルーツずかん』全6巻（リブリオ出版、共著）がある。このほか、『朝日園芸百科』（朝日新聞社）、『園芸植物大事典』（小学館）、『植物の世界』（朝日新聞社）、『なんでもわかる花と緑の事典』（六耀社）、『花をつくる』（八坂書房）など多数に分担執筆。

写真1

パフィオペティラム・アルメニアクムの自生地（中国・雲南省にて）

## 一瞬の不思議な出会い モザイクと先輩

第4期卒業生

藤田 雄彦

TAKEHIKO FUJITA



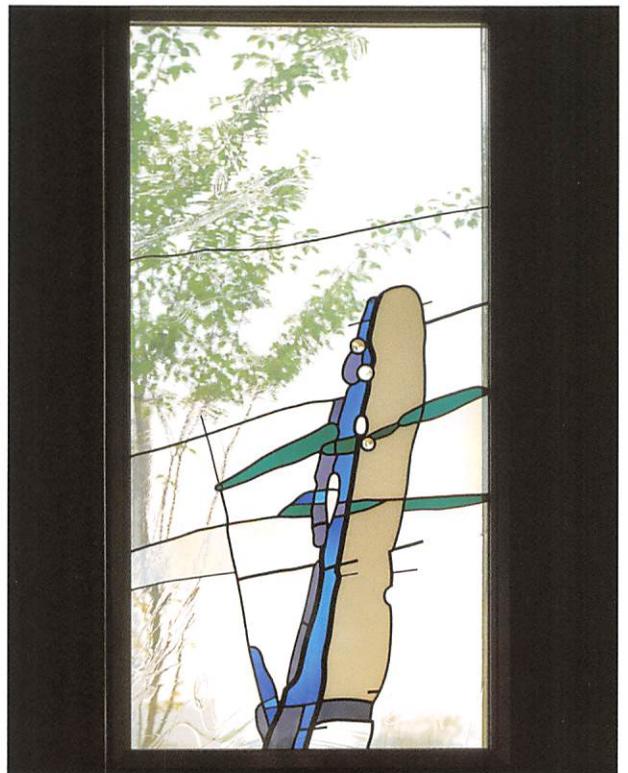
大阪府立東住吉高校 創立  
50周年 おめでとうございます。

私は東住吉高校に在学していたのは、まだ開校まもない頃で、堀江校長はじめ先生方も学校の歴史を創る気概にあふれていたように思います。なんせ美術系に進学を希望した生徒は私が初めてで、石膏デッサンを勉強する為に急遽、石膏像を購入して戴いた程でした。其の時の美術の矢野先生も京都の学芸大学（現、京都教育大学）を卒業されて、初めての赴任先での新進気鋭の先生でした。今から振り返って見ても私の人生で一番、一つの目標（其の時は入試）に向かって一生懸命になっていた時だったと感じます。元日に、学校にデッサンをするために行き、守衛さんに見咎められて、それから守衛さんと仲良くなった記憶があります（その頃、鍵を預かっていた）。

卒業して受験まで1ヶ月ほど時間があつたので、美術研究所に通いました。ところが受験前で気持ちがナーバスに為っていて直ぐにスランプに陥ります、すると研究所の先輩が「そんなにピリピリしてたら神経もてへんで、そんな時は一日のんびりと別なことをするのも好いのとチャウか？ワシの仕事場へ遊びに来るか？」と誘って下さった仕事場はモザイクを作る工房だったので。生まれて初めて

モザイクなるものを創ってみて、世の中にはこんな面白い仕事があるなんてと、高々10センチ角程の物を創らしてもらって奮えるほどの感動を覚えました。其のときに、学校を卒業したら此処へ勤めて技術を覚えて独立し、一生この仕事をしようと勝手に心に決めてしまいました。

一瞬の不思議な出会いで私の一生が決まってしまうました。私にとって素晴らしい出会いを作ってくれた先輩には今でも感謝いたしております。ラッキーとしか言いようがありません。それから44年経ちますがやっぱりモザイクを創っています。その後、お陰さまで晴れて矢野先生の後輩になることが出来ました。



大阪教育大学ステンドグラス



大阪梅田「泉の広場」(モザイク)

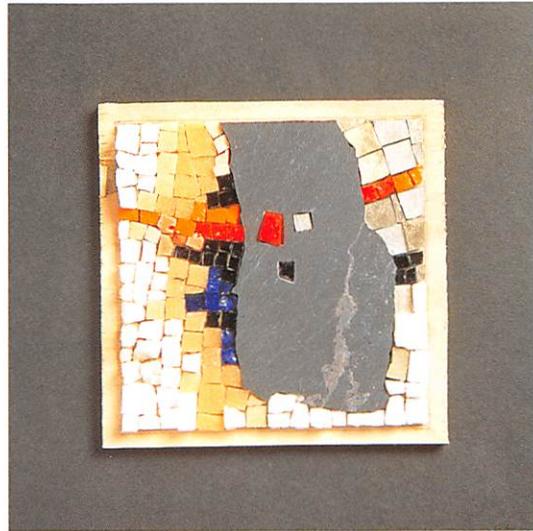


大阪市役所議場 (壁画)



安土町立図書館 (壁画)

(藤田雄彦氏紹介)



個展「みじんこ」

- 1943 大阪市に生まれる
- 1959 大阪府立東住吉高等学校入学
- 1963 国際絵画専攻学生イタリア展出品(油彩)文化大臣より「奨励賞」を受賞
- 1965 京都学芸大学(現・京都教育大学)特修美術科・西洋画科卒業
- 1968 アガタモザイク 設立
- 1977 ステンドグラス工房を併設
- 1981 京都府デザインフォーラム '81' あかり展パイロット作品を招待出品
- 1983 1984 フランクフルト国際見本市(JETRO/京都府)照明器具を出品
- 1988 京都市「新商品化研究会・新商品懇話会」展(京都・東京)  
"第12回 吉田 五十八"賞 建築関連美術部門に推挙される
- 1989 分野京都府「新和風開拓事業」展 招待出品 於:京都文化博物館照明器具  
"MADE IN KYOTO ベストデザイン賞"展に入選 EINシリーズ「無限」が選定
- 1992 第14回NSGショップ&インテリアデザインコンテスト「都ホテル博多」で  
(株)日建設計と共にグランプリを受賞 "ステンドグラスとその他の造形"

その後 個展、造形作品など多数

モザイク:大阪市庁舎 神戸市庁舎 南海なんば駅 大阪歯科大学病院 新阪急ホテル  
富山医科薬科大学 京都市伝統産業会館 郵便貯金会館 その他

ステンドグラス:日本銀行大阪支店 住友生命ビル 東洋陶器美術館 ホテル日航 その他

照明:出雲大社神楽殿 国際交流センター 湯木美術館 中小企業会館 その他

## 好きこそ物の 上手なれ

第9期卒業生

山中 晴夫

HARUO YAMANAKA



好きこそ物の上手なれといいますが、一生のうちに本当に好きな事を見つけるのは簡単な事ではありません。少し位好きな事は折につけいくらかでもあるが、一生同じ思いを持ち続けるのは本当に難しいものです。

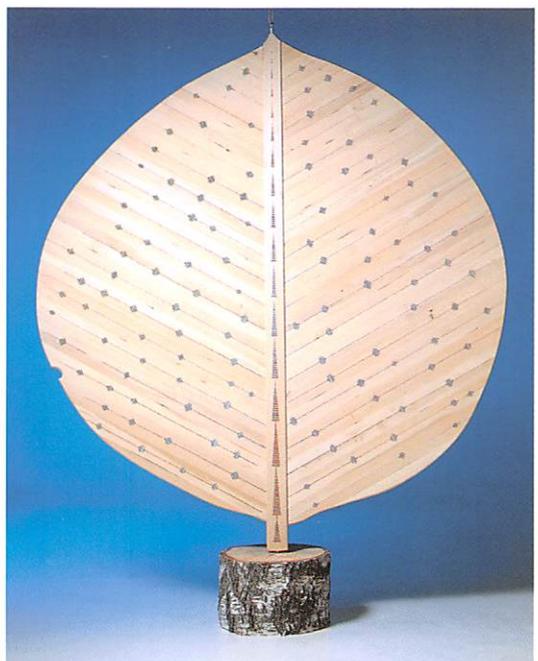
高校生活はあまりにのんびりと過ごしたおかげで、3年になり進路を決めるにあたり困ったものでした。たまたま美術部の同級生が美大を受検するというので募集要項を見せてもらおうと、京都美大（現京都芸大）の工芸科・漆専攻の中に「木工」と小さく書かれていた。漆には全く馴染みがなかったが木工という二字に引きつけられたのです。2年かかってやっと合格した日は35年経った今も忘れる事は出来ません。大阪市立美術館の地下で木炭デッサンをしたり、美術の矢野喜久男先生に鉛筆デッサンを見ていただいたりした受検時代が懐かしく思い起こされます。

大学は東山七条のお寺や博物館に囲まれた文化や芸術の香り豊かな処にありました。まだ市電が走っているのどかで庶民的な、学生を大事にしてくれる雰囲気のある街でした。1学年130人、私のクラスは8人で先生が5人と寺子屋の様な所でした。漆は原液が皮膚につくとほとんどの人が気触れるほど強い樹液です。私のクラスでも半分位はひ

どくて1週間ほど人前に出られない状態でした。火傷と似た症状で赤く腫れ、水ぶくれが出来、かさぶたになりおぼけの様な顔になるという具合です。もちろん痒いことといったら他に類がないでしょう。しかし治ってしまうとすっかり元通りになり、女の人は一皮むけてかえって綺麗になる位です。

そうこうしているうちに1年があっという間に過ぎました。1970年代に入り学園紛争が盛んになり、私達の大学にも改革を求める声が大きくなり、1年近く連日話し合いばかりが続きました。大学に入ったばかりで芸術の事もまだわからない私は戸惑ってしまいました。もうもうと立ち上がるタバコの煙の中で、教官と学生の問答を聞いていても答えの出るものではありません。まずは作品を創らねば。そんな時幸運にも銘木屋さんからトラック一杯の木っ端を手に入れる事が出来、それから毎日カンナをかけたりと木工を始めたのでした。卒業する頃にはトラック一杯の木もほとんどなくなり、それらの木が私を木工の世界へと導いてくれたのです。

物を作るという事は頭と体をバランス良く使うので人間にとって大事な行為です。好きだから今迄続けてこられたと思いますが、これからも人に喜んでもらえる様な物を創り続けたいと思っています。



「こもれび」 2.4m×1.8m×0.4m はんの木 白樺



「魚のベンチ」 210cm×50cm×90cm 樺・拭き漆

器から家具、オブジェまで、幅広い木工表現を展開する山中の作風は、木の特性を生かしつつも、重くなりすぎず、遊び心にあふれた軽快な新鮮さに満ちている。

「こもれび」は、新緑の季節に木々の若葉の間から降り注ぐ太陽の光や、生命力あふれる自然の姿を表したものである。

「都会の華」は、様々な表情が付けられたタワー状の木材の配置により、巨大化する都市や林立する高層ビルの中に、ふと古代の遺跡を重ねて想う作家の都市観が詩的に表現された作品である。

「工芸の現在—アメリカ、ヨーロッパ、アジアの21人」より

(山中晴夫氏紹介)

- 1947年 大阪生まれ
- 1974年 京都市立芸術大学美術部 工芸科塗装専攻科卒業
- 1993年 ヘルシンキデザイン芸術大学(フィンランド)・ファニチャーインテリア科留學
- 1998年～ 京都市立芸術大学美術学部工芸科 漆工専攻 助教授
- 2001年～ 京都市立芸術大学美術学部工芸科 漆工専攻 教授

主な展覧会歴および受賞歴

- 1978年 個展(ギャラリー・マロニエ/京都、'91、'92)
- 1981年 「箱で考える遊びの木箱」展(北海道立旭川美術館、'87)
- 1982年 日米アート&クラフト展(MROホール/金沢)
- 1984年 朝日現代クラフト展 グランプリ
- 1991年 京都デザイン大賞コンペ 金賞
- 1992年 京都工芸ビエンナーレ グランプリ
- 1993年 芸術祭典・京・四条ストリートギャラリーコンペ グランプリ  
「新しき融合」日本・韓国現代造形作家交流展  
(大阪府立現代美術センター、京都府ギャラリー、伊丹市立工芸センター)
- 1994年 個展(ヘルシンキデザイン芸術大学/フィンランド)  
グループ展(フィスカルス/フィンランド)
- 2000年 京都市立芸術大学創立120周年記念展(京都市美術館)
- 2003年 工芸の現代・アメリカ・ヨーロッパ・アジアの21人(金沢)



「都会の華」 45cm×45cm×55cm  
栃 タモ 樺 黒檀

## 私の音楽人生の始まり

第9期卒業生

中村 勝栄

KATSUO NAKAMURA



創立50周年おめでとうござ  
います。私の人生にとって不  
可欠であった東住吉高校3年  
間の生活を振り返らせて頂  
きます。姉が本校に入学して  
いた事から一度この高校を見  
る機会があり、当時大阪市内

に住んでいた私にはその田圃の真ん中に悠然と建っている  
様が実に感動的で、即座に東住吉高校入学を決意しました。  
小さい時から音楽が無性に好きなので楽譜もろくに読め  
てなかったのですが、入学の日、中学時代は家の事情で我  
慢していたクラブ活動、音楽部ブラスバンドに即入部し、  
私の音楽人生が始まりました。

朝昼放課後と音を出しまくった3年間でしたが、2年の  
5月頃、進路の話が出てきた時にはもう既に自分の前には  
「音楽」の二文字しか映らず、当時音楽担当の杉江先生に  
「音楽をしたい」と相談したところ、大阪学芸大学（現大  
阪教育大学）の特設音楽課程を教えて頂きました。ペー  
ーペンのピアノソナタの試験がある事から、以来私は自分  
に毎日3時間のピアノ練習を課しました。当時家にはピ  
アノが無いので、この練習を全て学校で消化すべく音楽室を  
私のHRとし、クラブ活動を挟んでピアノを弾く生活が始  
まりました。本来のHR教室を掃除した記憶は全くありま  
せんが、時折練習後に音楽室を掃除して充実した気分で家  
に帰ったものです。また、音楽室のピアノは当時練習室の

アップライトと教室のディアパーソンのグランドピアノが  
あり、先生の特別許可を頂いてグランドピアノも自由に弾  
かせて頂き、本来なら及びも付かない進学の夢を適えて頂  
いたこの環境にはつくづく感謝しています。また、学習時  
間確保のため、今思えば受験科目以外の授業の先生方には  
大変失礼な事でしたが、3年の途中から私と気持ちを同じ  
くするKさんと机を2つ教室の後ろに並べて黙々と受験科  
目の内職をしたものです。その我々をそっとそのままにし  
て置いてくれた先生方に深く感謝する次第です。

大学卒業後は3年間非常勤講師をしながら歌の勉強を続  
けておりましたが、その後、大阪府の教諭として採用され、  
私の音楽生活は学校の授業とクラブ活動指導に的が絞られ  
るようになりました。一方私の住所する大阪府豊能町の町  
立ホール建設にその準備段階から参加した事がきっかけ  
で、合唱団の指導に当たり、私の音楽世界が大きく広がり  
現在に至っています。自分が音楽を指導する上で大きな力  
を頂いたのは東住吉高校です。この時の思いは、当時の私  
のような環境の整っていない音楽好きの人達が少しでも音  
楽と接点を持ち、さらに演奏の喜びを確信できるようにと、  
私なりに新たな環境を作り上げていくことを自らの仕事と  
することに結実しています。

今、学校の授業、クラブ、地域の合唱団と音楽指導の仕  
事を与えられ充実した生活を送らせて頂いています。母校  
とは距離も隔てた所での生活ですが、時折東住吉高校の良  
き日を懐かしみ旧友とも飲み交わしています。終わりに  
なりましたが、この場をお借りしてお世話になった多くの先  
生方に深く感謝するとともに、母校での充実した自主自立  
の精神を生かすべく在校生の皆様のご精進、ご活躍をお祈  
りいたします



1997年 創立5周年記念 豊能混声ユーベルコール第1回演奏会 指揮 中村 勝栄氏

(中村勝栄氏紹介)

- 1966年（昭和41年） 大阪府立東住吉高等学校卒業（9期生）
- 1970年（昭和45年） 大阪教育大学特別教科（音楽）課程声楽専攻卒業  
桃山高校、和泉高校横山分校（現横山高校）非常勤講師  
二期会関西支部研究生
- 1973年（昭和48年） 大阪府立能勢高等学校教諭  
二期会関西支部準会員（約10年後退団）
- 1987年（昭和62年） 大阪府立桜塚高等学校教諭
- 1993年（平成5年） 豊能混声「ユーベルコール」指揮者
- 1999年（平成11年） 大阪府立池田北高等学校教諭
- 2003年（平成15年） 大阪府立茨木高等学校教諭

## 花は必ず咲く

第3期卒業生

島崎 (田中) 章

AKIKA SHIMAZAKI



昭和35年卒業の3期生、走ってばかりの関西学院大学での4年間、39年は社会人1年生の5月、オリンピック候補記録会の陸上競技110mハードルでオリンピック標準記録14秒2（日本記録）に到達。予想もしなかった「東京オリンピック出場」という夢が実現した。

思えば東住吉高校陸上部入部当時、走るのがあまり好きでなく、よく練習をさぼった私が「五輪（オリンピック）」という大舞台で走ったのだから、「弱い私」を知っている連中は、「お前がオリンピック代表選手？」と不思議がる。無理も無い、私もそう思った。その後4年間実業団で走ることになり、色々な大会に出場しながら、次の「メキシコ五輪」への連続出場を目指した。残念ながら標準記録に0.1秒及ばず、「二度目」は無念の涙となった。

負けた時の悔しさや練習の苦しさに挫折しそうになった時、コーチや先輩や友人に励まされ競技を長く続けることが出来た。その結果、ゴールでテープを切った時の満足感や表彰台の中央に立つ優越感を何度も何度も味わうことが出来た。又あまり外国へ行くことが出来なかったその当時、ユニバシアード大会やヨーロッパ遠征などに選出され、英国エリザベス女王の前で走ったのも良き青春の思い出だ。

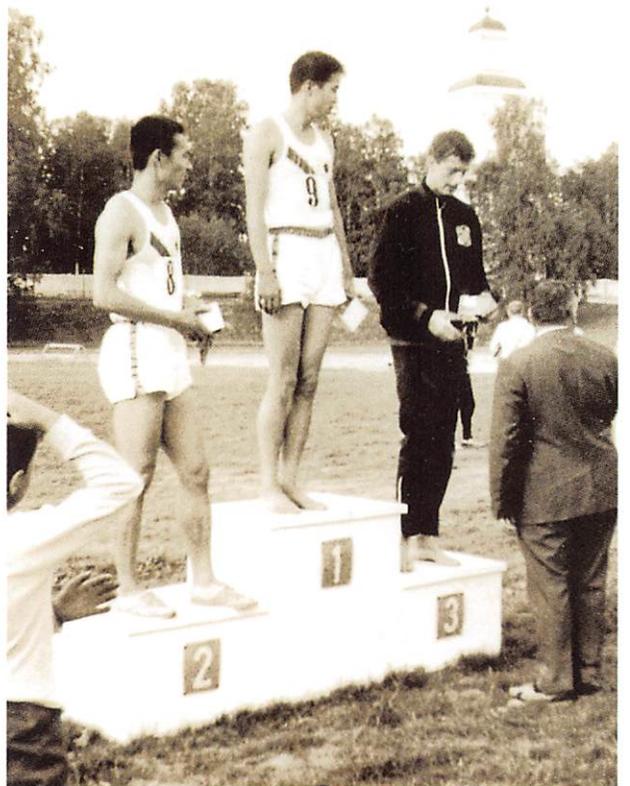
これらはみんな東住吉高校陸上部の「連帯の強い友」が

原点だ。競技を引退してからは結婚し、家業の林業を引き継いでもう数10年になる。杉や檜は植栽から伐採まで100年の年輪が必要な事業、チョッピリ日本の「環境と緑」に貢献しているのではないかと自負している今日此の頃。

現在、奈良と三重の県境にある高見山の麓に「しだれ桜の郷」を作るべく、成木や苗木を何百本と植栽中で、今年からあと何回この桜の花を見ることが出来るか？競争しようと、還暦を迎えたわが「連帯の友」たちとの約束。母校東住吉高校も今年で創立50周年。100周年を迎える頃には、このしだれ桜も立派な大木に成長して、見事全山に花を咲かせていることだろう。

創立50周年、おめでとうございます。今後益々発展することを期待しています。

高見山の桜のように。





安田 寛  
五輪候補記録会

田中 章

浜田 芳延

オリンピック候補記録会  
中央 島崎 (田中) 章氏



「しだれ桜の郷」  
2004年 早春

(島崎 章氏の主な競技歴)

- 昭和35年～38年 西日本学生陸上選手権大会 4年連続優勝
- 38年 全日本学生陸上選手権大会 優勝
- 39年5月 日本記録樹立 (14秒2)
- 9月 東京オリンピック出場
- 40年8月 ユニバシアード大会 (於ブタベスト) 7位
- 41年～43年 全日本選手権大会 優勝 (2回)
- 全日本実業団大会 優勝 (2回)
- 実業団対学生対抗 4連勝

## 継続こそが 夢の一步へ

第16期卒業生

末浪 昌子・阪 育子 (旧姓 藤原)

MASAKO SUENAMI  
IKUKO SAKA



東住吉高等学校 創立50周年 おめでとうございます。

東住吉高校の最初の印象は、入学願書を出しに行った日が丁度雨の日で、グラウンドの向こう側がかすんでいてよく見えず、なんと広いのだろうと

驚きました。

中学時代は、シンクロと部活のハンドボールの両方をしていました。高校では残念なことに、女子のハンドボール部がなく、結局シンクロだけを続けることになりました。授業が済むと、部活に行く楽しそうな友人たちを横目で見ながら、針中野駅まで走って、プールへ一目散という毎日でした。でも秋の学校行事の頃は、シンクロの方は丁度シーズンオフに入り、練習も少なくなりました。それで学校行事にも積極的に参加できるようになりました。体育祭では夕方遅くまで残って応援の練習をしたり、「炊き出し」でおにぎりを作ったり（ご飯が硬くて少しまずかったような…）と、毎日がとても楽しくて、学校中が盛り上がっていたのを覚えています。

シンクロを始めて2年目の時、練習が辛くて、コーチにシンクロをやめたいと申し出たことがありました。するとコーチから、「とりあえず、今日は泳いで帰りなさい。」と言われ、渋々泳いでいると何かしらモヤモヤが解消されて

いき、やはり続けてみようと考え直していました。それから1978年の西ベルリン世界大会出場を最後に、11年間の選手生活にピリオドを打ちました。

振り返ってみますと、最初から世界大会出場などという大きな目標があったわけではありませんでした。一つ一つの目の前にある大会で好成績を取りたい、そのために練習を続ける、その繰り返しの結果として、気が付くと描いていた夢がかなえられたという感じです。そして、私たちを教え伸ばしてくださったコーチの方、一緒がんばった仲間たち、いつも支えてくれた両親、と多くの方々のお陰で素晴らしい選手生活と人生を送ることができました。このことを忘れることはできません。感謝の気持ちで一杯です。

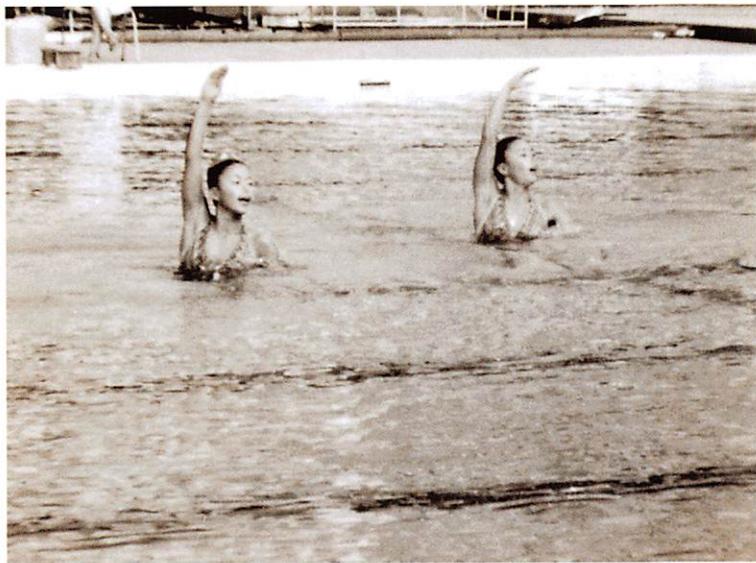
今は妹と二人で、小学生から70歳までの方にシンクロを教えています。「楽しく笑顔で。色々な事にチャレンジする。すぐに出来なくてもあきらめずに努力する。」をモットーにしています。そしてその結果、達成出来た時の充実感を感じてもらえればと思っています。人は誰でも何かに一生懸命になっている時は、瞳がキラキラ輝いています。そういう輝きが生まれるようにお手伝いできればと、身体の動く限り頑張って続けて行こうと思っています。





**II CAMPEONATO MUNDIAL DE NATACION**  
 Clavados - Polo Acuatico - Nado Sincronizado  
 Cali Julio 1975 Colombia

**II WORLD SWIMMING CHAMPIONSHIP**  
 Diving - Water Polo - Synchronized Swimming  
 Cali July 1975 Colombia



(未浪昌子氏・阪育子氏の主な競技歴)

- 1973年 第1回 世界大会 (ユーゴスラビア)  
 ティーム3位  
 デュエット3位
- 1974年 第1回パンパシフィック大会 (ハワイ)  
 ティーム3位  
 デュエット3位
- 1974年 10月~1975年4月  
 アメリカ サンタナチーム留学
- 1975年 第2回世界大会 (コロンビア)  
 ティーム3位  
 デュエット3位
- 1976年 第2回パンパシフィック大会 (名古屋)  
 ティーム3位  
 デュエット3位
- 1977年 第3回パンパシフィック大会 (メキシコ)  
 ティーム3位  
 デュエット3位
- 1978年 第3回世界大会 (西ベルリン)  
 ティーム2位  
 デュエット2位



## 自由闊達な精神

第23期卒業生

三代目林家染二 (吉田 忠史)

SOMEJI HAYASHIYA



創立50周年誠にありがとうございます。

胸をときめかせて見つめた合格発表から4半世紀が過ぎた今、この原稿を書かせていただきながら高校生活が鮮やかによみがえり、その色褪せない

時間に驚きを隠せません。自由闊達な校風、個性豊かな先生方、府下唯一だった木造校舎、体育祭や文化祭などの学校行事から生まれる一体感。一つ一つが大切な思い出となっています。

卒業後、私は大学4年生の9月に4代目林家染丸（当時2代目林家染二）に入門し、今年で落語家生活20周年を迎えます。また師匠染丸が設立以来芸能文化科で講師を務めており、本校（母校）との縁を感じております。

東住吉高校で学んだ中から、私と共に、桂しん吉（40期生）、桂吉坊（43期生）、桂佐ん吉（45期生）〔3名は桂吉朝門下〕、林家市楼（42期生）〔林家染語楼門下〕の5名が落語家の道で精進しております。同窓生、先生方はじめ学校関係者の皆様、新聞や雑誌その他で名前を見かけられましたら、是非とも落語会の方へお足をお運びいただき、ご声援下さい。

落語は、350年前に出来た日本の伝統話芸です。そこには、現代では見失われがちな近隣意識や情の世界が広がり、

人と人の心が触れ合うあたたかさやさしさで笑いを生み出しています。また落語には、今社会で求められている、何よりも強くやさしく人の心を感じとって生きる人間力が溢れています。そして、自主創造性重んじる東住吉高校の精神は正に人間力の創造です。その中で人生の糧となる3年間を過ごせた事に感謝しております。

最後になりましたが、芸能文化科設立から御尽力され、私を含め卒業生にも御高配下さいました仲慶謚先生の校史に残る御功績と熱いお心を胸に刻み、同窓生並びに後輩の皆様様の輝かしい未来と東住吉高校の永遠の発展をお祈り申し上げます。

## (林家染二氏紹介)

- 本名 吉田忠史 (よしだ ただし)
- 生年月日 昭和36年9月17日 身長179CM 体重68KG  
血液型B型
- 最終学歴 龍谷大学 法学部卒業 (昭和60年3月)  
中学校・高等学校社会科教員免許 取得
- 入門 昭和59年9月 林家染二 (現 四代目林家染丸)  
芸名 染吉
- 初舞台 昭和60年7月 林家一門会「林染会」
- 襲名 平成9年10月 三代目林家染二を襲名
- 受賞歴 平成5年 NHK新人演芸大賞 優秀賞  
平成8年 大阪文化祭賞 奨励賞  
(大阪府・大阪市並びに両教育委員会 選定)  
平成10年 第53回文化庁芸術祭  
演芸部門優秀賞
- 役職 上方落語協会 理事付き役員
- 出演番組 NHK大阪放送局40周年記念「時の詩」  
「上方演芸ホール」  
日本テレビ「笑点35周年記念新春スペシャル」  
朝日放送「日曜なみはや亭」  
よみうりテレビ「平成紅梅亭」
- 主な活動 ・独演会 (大阪・東京など各地で開催)  
・月例落語会「上方落語 林家亭」  
・芸術鑑賞落語公演  
(小学校 中学校 高等学校 他)  
・講演 (健康講座 婦人講座  
PTA主催成人教育 企業研修 他)  
・日航名人会 (日本航空主催 平成8年より  
海外19カ国30都市で公演)
- 事務所 染ニプロジェクト  
TEL 06-6624-8898  
FAX 06-6624-8808  
Eメール SOMEJI@OFFICE.UDN.NE.JP  
ホームページ  
HTTP://WWW1.UDN.NE.JP/~SOMEJI/



芝居噺と共に滑稽噺を得意とし、パワフルな高座で幅広い客層を集めている。上方落語会において過去最短の芸歴で文化庁芸術祭優秀賞を受賞するなど、次代を担う正統派として注目されている。

又、平成3年上岡演劇祭 (上岡龍太郎氏主宰) 敢闘賞・平成10年市川猿之助歌舞伎ワークショップ 猿之助賞・平成11年龍谷奨励賞 (龍谷大学校友会) を受賞している。

キャッチフレーズは「上方落語会の中村橋之助」。趣味は演劇鑑賞。特技は日本舞踊。

# 「坊ちゃん」の世界

2期生

塩谷 俊雄

1959年の卒業だから、もう45年になる。摂陽中学校のバラック校舎で入試を受け、入学した1年目は木造一棟の校舎だった。学校のまわりは一面の田んぼと畑。およそイメージしていた「高等学校」とはまるで違った環境での高校生活のスタートだった。



だからこそだったかもしれないが、教育実践の中身は多様で、特色がいっぱいだったように思う。それだけに思い出も多い3年間だったし、今でも母校への想いは尽きないものがあるのだろう。

その中での「当麻寺合宿」もたいへん印象深いものの一つであった。確か2年生の夏から始まったと思うが、大学進学のための準備のために、学校が希望者を募って1週間ぐらいだったか、牡丹でも有名な大和の当麻寺の宿坊に泊り込んでの合宿が行われた。進学の意志に燃えている(?)参加生徒たちに対し、先生たちも交替で泊り込んで勉強を見ていただいたのであるが、若気の至りで、実はそんな綺麗事では済むはずのない毎日だったのである。

お寺の近所のスイカ畑から丸々とした大きなスイカをこっそり失敬してきた友達もあったし、消灯後、得々と

して人間の生の根源の「ロマンス」を語る友もいた。時には先生たちの部屋から、ビール瓶のガチャガチャ触れ合う音が聞こえてきて、「おい、先生ら飲んどるぞ」と大いに羨ましがったこともある。

深夜「肝試し」と称して、お寺の納骨堂に忍び込み、整然と安置されたお骨を勝手に並び替えるなどの、神仏を恐れぬ罰当たりを働いたこともあった。

ある時、合宿仲間の某君は「気が小さいらしい」と、悪戯心をおこした連中で、熟睡中の某君をそおっと部屋から運び出し、深夜の納骨堂に独り置いてこようと企んだことがあった。途中で目覚めた某君のびっくりした表情や振舞いが、今でも目に浮かんでくる。その某君は既に亡いが、大学進学の勉強はどこへやら、みんなでせつせと「坊ちゃん」の世界に浸っていたのである。この思い出深い「当麻寺合宿」が、我々の学年以降はどうなったのか、知らない。こんな「成果」しか挙げられないのかと、先生たちの不興を買ったのかもしれない。

後年、思いがけず大阪府議になり、最初に府議会の文教常任委員会に所属した折、理事者席に座っておられた、府教委に転出された担任の三木先生をお見かけした。しかし、私の質問時間が近づくと、先生の姿は委員会室から見えなくなっていた。高校時代、折角の「合宿」で、あんなつまらないことを嬉々としてやっていた教え子が、およそ教育問題でまともな質問など出来るはずがない、さしずめ「聞いちゃおれん」と思われたのではなかったか。

以来、先生にお目にかかる機会はないが、一度その時のお気持ちをお聞きしてみたいもの、今でも思っている。

## 恩師の教えを大切に

3期生

能登 康宏

東住吉高校創立50周年にあたり心からお祝い申し上げます。今年ではや50年、「光陰矢の如し」、歳の流れの速さに感慨無量です。

在校当時、どの学校にも負けないすばらしい高校を創りあげていくという共通目標に向かって教職員・保護者・生徒が一丸となっていました。苦しい日々でしたが、創りあげていく喜びがありました。柔軟性のある自由な校風をつくろうと生徒は先生の指導を受けながらがんばりました。先生からは生徒一人一人の長所を見つけ、伸ばし、育て認めていただきました。学校の創設初期に高等学校としての礎が築かれました。

修学旅行を止めて実施された信州霧ヶ峰での教育キャンプ。そのキャンプを通して色々な経験を積みながら自己を鍛えていきました。生徒が何物にも屈しない強い肉体と精神を養うよう訓練されました。

毎朝の生徒朝礼。校長先生のお話があり、その後体操をしたりクラス単位で先生と一緒に走ったりしました。田んぼの真中を走るため身を切られる思いでした。

合宿訓練。当麻寺などで学力をつけるための合宿補習が行われ、期間は10日間で毎日10時間以上の勉強をしました。そこで勉強に耐えることを覚えました。

そのほか、春の金剛登山、1万メートルマラソン駅伝、昼食時の校長先生との会食、随想録提出、5分間スピーチなど他校にない行事が数々実施されたことが浮んできます。今では実情に合わないことも多数あると思いますが、時代の流れに迎合せず、独自の行事や建学の精神を今に伝えてきたのが即ち東住吉

高校の伝統であり校風であろうと思われます。

高校卒業前、東住吉高校で学んだことを将来実践する職業としては、教職の道に就くことだと考えました。教育系の大学に合格した4年後、迷うことなく教員採用試験を受験し、そして運良く大阪市の中学校教員に採用されました。以来37年間教職の道を歩きました。

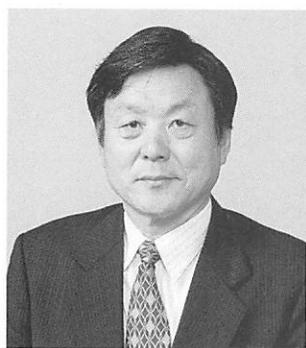
その教職生活の中で悩みを抱くことがありました。例えば、中学生を心身ともに鍛えるにはどうしたらよいか。学力を高めるにはどうしたらよいか。3年時の修学旅行で、生徒にとって一番よい学習内容にするには、いつどこで実施するのがよいか。週1回の全校集会で、どんな内容の話をするか、生徒が成人になった時にも記憶に残っていて役に立つのかなどでした。これらの悩みに会った時、高校時代の随想録を見て指導内容を思い出して、解決のきっかけを見つけていました。自分なりに課題を整理、取捨選択して決断し、実践しました。社会人になってからも高校時代の教えが役立っていました。還暦を過ぎた今も母校で培った「独立・自主・自由」の精神を思い出しながら毎日の生活を送っています。



# 新設校の特色づくり

4期生

北川 吉平



昭和30年、大阪市立中野中学校に入学した私は、昼休みになると、蛙を捕まえたりしながら、友人と学校周辺の探検にでかけた。ある日、中学校から500メートルほど離れた田んぼの中に、新しい高校ができたことを示す標柱を発見した。「大阪府立東住吉高等学校」と書かれた学校は、校舎がなかった。3年後、私は、新設4年目のその高校に入学した。自分も含めてのことだが、飛び切り成績の良い人や目的意識の明確な生徒は余りいなかった。しかし、先生方は違っていた。新しい学校作りにとっても意欲的で、生徒はいつもその気迫に圧倒されていた。どちらかというと劣等感の方が強い生徒に自信を植え付けようと、あらゆる教育活動に工夫が凝らされ、熱がこもっていた。特に東住吉ならではの特色が次々と姿を現しつつあった。母校が50年も昔に本格的な特色づくりを実施していたことを大変誇らしく思う。

例をあげてみたい。毎朝、全校朝礼が行われ、校長先生の訓話で一日が始まった。寒い日は、朝礼後担任の先生について学校周辺を走った。片道3キロメートル以内は徒歩で通学する決まりだった。春と冬の金剛登山、大和川の堤防を走って学校との間を往復するマラソン大会、出身中学校訪問駅伝大会、体育祭ならぬ校内陸上競技大会、天王寺高校の深い深いプールを借りて行った水泳の授業、淡路島での宿泊水泳訓練。厳しい躰として、男子の髪は丸刈り、学生帽の着用、手袋・マフラー・コー

ト等の防寒具は禁止、教室の暖房なし、昼休みの3分間スピーチ、随想録を週一回提出など。その他、折々の万歳三唱、選択ドイツ語の授業、成績上位者名の掲出、成績によるクラス分け、年間20日間の勉強合宿など、数え上げればきりが無いが、とりわけ東住吉の名前を全国的にしたのは、教育キャンプであった。この行事については別項で記録されていることと思うが、高校生活の最高の思い出として東住吉高校50年の前半の卒業生に共通する、東住吉教育を代表する行事であった。信州霧ヶ峰は、ニッコウキスゲの花が黄色い絨毯を敷き詰めたように咲き揃い、夢のような美しさだった。そのお花畑にテントを張り、皆が協力して食事を作る。遠足に出かけたり、作業をしたり、夜にはファイアーを囲み歌い踊る。草原に寝そべって、青い空に浮かぶ雲や八ヶ岳を眺めながら友と語る。こんな幸せな学校生活を送っている高校生は、全国のどこにもいないのではないかと考えた。入学以来の様々な経験を思い起こして、東住吉に入学してよかったと心底から思った。東住吉高校に対する愛着や誇りが夏雲のように湧き上がって来た。さらに、音楽の杉江先生が昭和33年に中野中学校から東住吉高校に転勤されたため、私たちは図らずも教科限定型の中・高一貫教育を受け、私はその後の人生の各場面で音楽とのかかわりを持つことになった。

私の音楽や野外活動や教師の道へのきっかけは、すべて高校時代にある。高校時代に受けた教育は、その後の人生を決定づける重要な意味を持つことを自らの経験を通じて確信している。私はとても幸せな人生を送らせて貰っていると思う。

## 私を育ててくれた陸上競技部

5期生

山上 哲郎

いにしえより、光陰矢の如し、時人を待たずと言う言葉があります。時の流れのスピードに驚いております。私もはや還暦を迎えました。高校生頃、60歳ともなれば、盆栽をいじりながら、孫の守りをしているほほえましい風景の記憶が残っていますが、今や、年金受給年齢の引き上げで、老体にムチうっての通勤の姿が痛々しく感じられる昨今です。

当時、スポーツと言えば野球。野球部のない学校は学校ではないと言われた時代。初代学校長堀江校長は、体育クラブの野球部がグラウンドを独占していたのでは、他のスポーツが育たないという考えから、野球部を設置されない、真のスポーツ愛好者の先生でありました。

陸上、ハンドボール、バレー、テニス等のクラブ部員達がグラウンドいっぱい、のびのび練習している光景が目に見えます。スポーツの友人を得たい一心から、どのクラブを選択する考えもなく、なにげなく陸上部に加入いたしました。なにげなく陸上競技部を選択した事が、私の人生に決定的な影響を与えてくれました。高校生として誰しも悩み、直面する進学の問題です。陸上部を辞め、できもしないのに勉学に専念したいと言う相談を保田先生にもちかけたところ、この学校で優秀な成績を残

すのと、ハンマー投げで大阪大会、近畿大会で優勝すると世間の評価がどちらが高いかよく考えろと叱咤されました。私は青春をハンマー投げに打ち込もうと決心し、毎日、日没まで投げ続けました。

ある日、保田先生から、試合は好天の時ばかりではない雨も降る。雨を想定した練習をしと言われ、サークルにバケツいっぱい水をまき準備をしました。奇しくも近畿大会で豪雨になり、上位の記録選手が次々と失格し、私は普段どおりの記録で優勝できました。

『治にいて乱を忘れず』危機意識の大切さを学びました。全国大会は静岡県のくさなぎ競技場で開催され、私は、東京教育大学出身で棒高跳びの第一人者武田透先輩(当時体育教師のOB)につれられ、大会に出場しました。

日大三島高校室伏の名前が印象的でした。その選手と戦うことになり、彼は60m、私は50m、圧倒的な差で負けました。今年、アテネオリンピックで金メダルを獲得した室伏広治選手の父親です。

この競技を通じて、良き指導者、良き先輩、良き人々と出会い、そしてさまざまな体験ができ、私の人格形成に役立ち、陽の当たらない下積生活でのリーダーとしての人間のあり方を学び、社会人にさせてくれました。ハンマー投げは孤独なスポーツですが、

物事を決断するには自分しかありません。個を磨くのに大変役立つスポーツです。

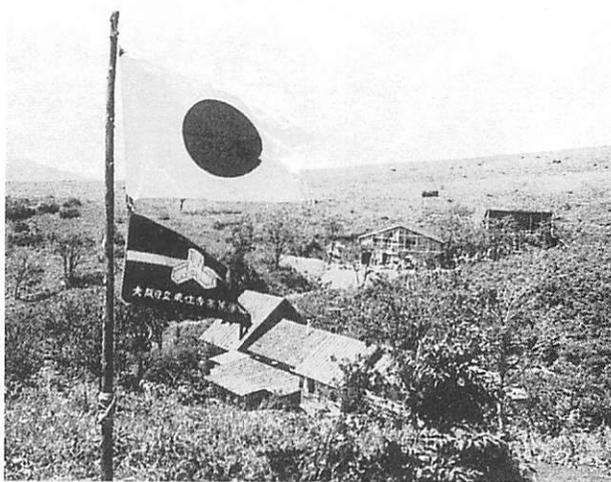


## クラブ活動の思い出

8期生

東 隆夫

東住吉高校創立50周年おめでとうございます。  
私は中学時代から陸上競技部に所属し、高校進学では東京の目黒高校か東住吉高校のどちらかの選択でしたが東住吉高校に入学しました。入学した当時は東住吉高校陸上部は全国でも上位クラスの成績を残しておりました。練習量、練習内容では大阪でも1位、2位を争うものすごい学校でした。私は入学した当初から頭の中は陸上競技のことばかり、勉強はそっこのけ、勉強の成績は下がる一方、そのツケが回り1年留年、それでもこりず陸上に没頭。2年生になっなおかつ成績が上がらず、その時の担任の先生から「東君、クラブ止めて勉強なさい。」と言われたときのショックは今でも覚えています。この1年間は勉強もせず、ぶらぶらするだけ、遊びを覚えませんでした。



3年生の初め陸上部の顧問の保田先生に体育教室に呼ばれ「東、そろそろ走ったらどうや！勉強で1番は取れんぞ！。今からやれば1番になれる。」との保田先生のアドバイスでもう一度練習開始、その年の陸上の成績は800mリレーで大阪インターハイ、近畿インターハイ、そ

して全日本インターハイまで進みました。保田先生、武田先生、苦勞をかけました。個人成績では、100m 11秒0の成績を残せました。勉強の方も少しずつ上がっていきましました。そして無事卒業。次は大学進学です。今まで勉強していない私は、大学の入試に合格しなければ大学での競技は出来なくなるので、今度は勉強で頑張りました(答え付の問題集をまる暗記)。無事近畿大学に入学できました。

高校時代の思い出は数多くありますが、私の場合は一般の学生と少し違ったと思います。あくまで陸上競技を中心にものを考えていましたから。大学でも4年間陸上部に所属し、卒業後もマスターズで走って居りました。今でも近畿大学陸上部指導スタッフの一員及びOB会のお世話。それに中でも全日本学生陸上競技連合評議員、関西学生陸上競技連盟評議員と色々な大会役員でも頑張っ居ります。今までに色々と指導していただいた先生方への恩返しと思っ居ります。

高校時代の1年留年と陸上部の1年間の休部、そして保田先生のアドバイス、これが私の人生を左右したものだと思っいます。「生きる力」を頂いたような気がします。

現在、小さな会社を営んでおります。今年で59歳、もう10年余し頑張らなければいけないと思っっています。仕事、趣味のスキーとボランティアとでこれからも頑張りたいです。

私と家内(東住吉高卒)とで、二人の娘のうち一人は母校にと思っ気持ちが通じて、娘も東住吉を卒業して今は社会人、孫も出来れば一人は母校にと思っ私の小さな夢です。東住吉高の好きなわけは校歌そのものです。これからも60年、70年…100年と時を刻んでください。皆様方の活躍に心から期待して居ります。

## もう一人の恩師 松田稔先生のこと

—霧ヶ峰キャンプ創始者秘話—

10期生

花田 白蓮坊

分け入っても分け入っても青い山 山頭火

放浪の冒頭俳人山頭火は詠んだ。「自らのゆく道は山また山全く先が見えない。でも青い山や草木の中なぜか心は穏やかで心地よい。」私が同じ様な思いをしたのはキャンプリーダーとして山に臨む時、そして師松田稔の教えを反芻する時であった。

東住吉高校の霧ヶ峰キャンプを堀江駒太郎初代校長の求めに応じ提案したのは、当時大阪YMCA副総主事の彼だった。「キャンプは自然との関わりの中で自然と人間とのあり方を実際に身をもって体験し、そして人と人との交わりの中で個を確立するところ。そのことにより精神的な生まれかわりを多くの青少年が経験するところ」との理念を持ち、人間形成の大切な時期である年代の青少年女達に、教室では得られない重要な教育的役割を果たすものと信ずる松田先生。

「新設高校に新しい気風と、それにふさわしい若い人達のためのプログラムを用意したい。」という堀江校長。お二人の決断は早かった。大阪府教育委員会での会議のあとにこの相談事はなされたと聞く。その後、松田先生は本格的な教育キャンプ、生徒の自主性を尊重するキャンプをグループワークの手法を用いてプランニングされ、高校の先生方をリーダー養成された。自らは前面に出ることなく援助されたようである。ここに日本初の教育キャンプ即ち東住吉高校の霧ヶ峰キャンプは生まれた。この秘話は能勢の野外活動センターで私が創作演出したキャンドルセレモニーの後に、褒美として話されたものです。

私達の世代にとって霧ヶ峰キャンプこそが、学校における最大の思い出。それはキャンプで各々が人間としての成長を経験したからと思う。教育キャンプは東住吉から全国に広がった。今もサマーキャンプ等の学校行事にその系譜は繋がっている。

彼もまた私達にとって恩師の一人である。ことに霧ヶ峰世代には彼のことを伝えたい。温厚で優しい眼差し、誰にも相手の人格を尊重する態度と言葉遣い、そして青少年指導者には厳しかった。飲酒しての指導など許されなかった。敬虔なクリスチャン。大阪青少年活動振興協会理事、大阪府総合青少年野外活動センター初代所長。日本キャンプ協会副会長等を歴任され、大阪府青少年カウンセラー認定講習の教務主任格講師もなされた。スイス民謡「おおブレネリ」の訳詩者でもある。

次の世代のキャンプ指導にあたっていた時ふとわが担任、自然に祈りを捧げる山男天野浩先生のこととも思い出した。騒ぎだけの単なるキャンプを行おうとした人達を厳しく叱責されていた。我が師、我が友、我が母校。我が青春の霧ヶ峰。

自然を青少年に 青少年を自然に 松田 稔



# ありがとう 東住吉高校！ ありがとう 生徒諸君！

12期生

中村 伸行

母校の創立50周年記念にあたり、12期生の生徒として過ごした3年間ではなく、体育科の教員として勤めさせて頂いた12年を振り返ってみたいと思います。

大学卒業後に富田林市立第一中学校に2年間勤務しました。その後、大阪府立生野高校に11年間勤務した後、1986年度（昭和61年度）から1997年度（平成9年度）まで12年間の長きにわたりお世話になりました。

最初の3年間は男子授業を中心に卒業まで担当し、その後の3年間は女子授業を中心に卒業まで担当しました。幸運にも最初の6年間で男女のカリキュラムを系統的・継続的に担当させて頂いたことが、今の自分の教科指導のベースになっているように思います。

男子授業では学校体操、陸上競技、持久走、器械運動、水泳、サッカー、バレーボール、ハンドボール、バスケットボール、ラグビー、バドミントン、テニス、卓球、柔道等の指導方法を学び、女子授業ではそれらの種目に加え創作ダンス、平均台、縄跳び等も学ばせて頂きました。特に、陸上競技では府下に誇ることの出来る東住吉高校伝統の棒高跳び授業や、ハードル走授業のきめ細かい指導方法や授業展開方法、また器械運動のマット運動、平行棒、吊り輪、鉄棒、跳馬等の体育館一杯を機能的に

使った指導などは、他の学校にはない素晴らしい内容であったと思っています。最も恵まれていたことは、各種目のエキスパートの先生方から直接、熱心に、丁寧に、厳しく指導方法や各種目のセッティング方法、授業展開の方法、けが防止対策方法等を教えて頂いたことです。また空き授業の時は諸先輩先生方から厳しく実技指導をして頂いたことも大きかったです。それに加え、真面目な態度で熱心に取り組んでくれた東住吉高校の生徒達のお陰であると心から感謝しています。

また単に授業だけではなく、長居公園やおおいずみ緑地を使った耐寒訓練での取り組みや、志賀高原熊ノ湯スキー場での学校スキー行事に参加させて頂いたことや、毎日暗くなるまで頑張っておおいずみ緑地と夢を共に追い続けてくれたサッカー部の生徒達と触れあえたこともとてもよい勉強になりました。長い期間にわたり素晴らしい教育環境の中で生徒と共に成長させて頂いて、『ありがとう東住吉高校！』『ありがとう生徒諸君！』と声高らかにお礼を言いたいと思います。

母校の益々のご発展と現役の先生方、生徒達及び卒業生の方々の奮闘を心から願っています。



# 十三期会のいちご 光陰如矢

13期生

廣野 均



おいっす！ 団塊の世代全員集合！ 同期のみんな、元気してますか？なんて、な。

もとよりありもしない学園広場に憧れて意気揚揚と潜った英知の門。入学式当日あの広大な運動場に整列して偶然知り合った友。1年5組豊永先生率いるいちご誕生の記念日でもある。以来30有余年絶えることなく友情の芽を育んできました。

霧ヶ峰教育キャンプでは、のいちご純会員の我ら「持てない隊」はひとまとめに束ねられて、男子校と見紛うほどのニキビ顔した集団が、モテたい一心で飯盒をぶら下げてあっちへうろうろ、ペグ（テント用の杭）を持ってこっちへうろうろ。簡易トイレの扉をノックを忘れて開けたら、その中にしゃがんで大忙しの保田先生に怒

られて…。

校内のバラ園の横の、霧ヶ峰の車山を模して敷き詰められた芝生の上で、授業の休憩時間ごとに学舎を出てきてはそこで取った力相撲、切れたベルトが5万本。また、ほんの少しの間、陸上部に籍を置いていただいた頃は100メートル短距離走の練習中。ゴールの先に建っていたプレハブ木造の文化部部室まで猛ダッシュ！ 目標はその建物の中に居るはずの文芸部の（僕だけの）マドンナ。そんな不埒な練習をしているうちについては卒業アルバムに文芸

部CAPとして集合写真に収まる始末。母校ありて部活あり。13期の文芸部の皆さん、この場をお借りしてお礼申し上げます。

卒業後何度か、のいちごの面々で恩師のご自宅へも訪ねました。その豊永先生は先達で晴れて現役勇退され関大文学部名誉教授になられた由。ご自身何冊目かの英文法の著書も発刊されたりと益々お元気なご様子。「知恩方解報恩」はいつになることやら…。

そして「無常迅速」を想いつつ、人生は戦いの連続であるという「初心」を忘れず、心の自由、自立、独立をこれから先も目指し続けます。ヒスミ（東住吉高）の50周年を祝いつつ…。

# はじまりは霧ヶ峰キャンプ

13期生

西川 加津枝 (旧姓 西尾)

この度は、創立50周年記念に際し、思い出をつづらせていただけますことに感謝申し上げます。

私は13期生です。木造校舎があり、校門の両横には広々とした芝生があり、学校周辺は、田んぼや地道が残っていました。久し振りにゆっくり当時を思い返してみ、私の中での一番の思い出と言え、やはり「霧ヶ峰キャンプ」です。

1年生の夏、やっと友達が出来かけた頃に行ってるんですが、当時同じ班だった友人とは、今では人生の半分以上を語り合い、生きて来た、姉妹より深い間柄と思える程になっています。

霧ヶ峰キャンプでの思い出は、テント、シャベル、蓼ノ海、諏訪の旅館各場面いろいろありますが、どこにいても思いきり語り合っていました。今と違って携帯電話もパソコンもローソンも無い時代ですから、不便な面もありましたが、平和で穏やかな時代でした。いじめや援助交際なんてとんでもない、まっすぐで真剣な時代でしたよ。

各学年ごとの担任の先生や、教科の先生を懐かしく思い浮かべ、どの先生方も勉強だけでなく、教え育んで下

さっていたことがしっかりと感じ取れます。厳しさと優しさのバランスがうまく保たれていたんですね。私達もテストとなれば、泊り込みで徹夜するほど勉強もしました。文化祭、体育祭となれば思い切り準備に没頭しました。自由に行事をさせていただきながら責任感や連帯感も養うことが出来たと思います。人生50年を過ぎてもはっきりと高校生活の中で思い返すことが出来るシーンがある事は、とても充実した3年間だったからです。今、「東住吉高校出身者に犯罪者は出ない」そんな確信が思い浮ぶほどです。

時代はどんどん流れ、失われる物が多すぎますが、教育とは、大学進学率ではなく、人間として、X染色体、Y染色体の違いを認め合いながら生きていく、そして、誠実で一生懸命で正直な人間を育てることではないでしょうか。そんな場であっていただきたいと願っています。

霧ヶ峰キャンプは、ずいぶん前に中止になっているようですが、場所は何処でもいいんです、青春のスタートがきっとあると思いますから。

私のスタート「霧ヶ峰」。

母校の祈念すべき日に 乾杯！



## 思い出

### 自主創造の精神

13期生

兵庫 将夫

創立50周年おめでとうございます。思えば早いもので、入学した年から数えて40年近くの歳月が流れました。わが母校は緑豊かな学校との印象があります。校門を入ると広い芝生の空間、鉄筋校舎（3階）と木造校舎（2階）の間にゆったりとした緑豊かな木々があり、木造校舎の南側にはよく手入れされたバラ園と芝生の小さな丘（通称 霧ヶ峰）がありました。食堂の前には藤棚があり、われわれ生徒たちの憩いの場所となっていました。当時、市内では木造校舎

は少なかったのではないかと思います。また、校舎とグラウンドの間には御堂筋と呼ばれていたイチョウ並木がありました。放課後は、広いグラウンドでたくさんの生徒がクラブ活動しており、活気が満ちていました。

高校の3年間は、あっという間でしたが、充実したものでした。1年生での霧ヶ峰キャンプは、テントや山小屋での宿泊、飯盒炊さんやキャンプファイヤーなど思い出深いものがあります。ニッコウキスゲの群落など信州の大自然に触れ、先生方とともにテントを張り、友人と遅くまで語り暖かい交流の機会となりました。体育祭では、全学年（1～3年生）を4グループに分け、互いに競い合いました。準備期間の終盤では遅くまで準備を行うこともしばしばありました。そのような時には、生徒たちによるおにぎりの炊き出しがあり、時たま、シンのあるゴハンのおにぎりを食べながら準備をしたことが懐かしく思い出されます。このような行事を通して1～



3年生の交流が図られた気がします。

また、真夏に当麻寺で行われた合宿（1週間）では、1日10時間勉強をすることを目標に行われました。当時は、クーラーも普及していない時代でもあり苦しくまた楽しい思い出でもあります。また、入学してすぐに行われる伝統の金剛登山、1年生と2年生の真冬の耐寒マラソンなどが思い出されます。

今から思うと、さまざまな行事や学校生活を通して「たくましい自主創造の精神」を育むように計画されていたように思います。これらの行事も時代とともに変化しているものと思いますが、後輩の皆様も充実した高校生活を過ごす中で、新しい時代の担い手として豊かな感性と進取の気性、確かな実行力を身に付けてもらいたいと願っています。

これからの東住吉高校の益々の発展を祈念いたします。

# 高校生活を振り返って

14期生

別府 隆之



東住吉高校創立50周年おめでとうございます。

月日の経つのは早いもので、1971年3月に高校を卒業してから30余年の歳月が流れました。入学当時、学校の周りはまだまだ田畑が多く、清閑で緑が多い環境の良い東住吉区にあり、校地・グラウンドとも他校より広がったように思います。また、2階建て木造校舎中庭には、薔薇の花壇や芝生などがあり、3年間素晴らしい自然環境で育った事を今でも鮮明に覚えています。そのような環境で学び育ったせいも、先生・生徒とも何事に対しても大らかで、勉強よりクラブ活動の方が盛んな高校だったように思います。

私は、3年間卓球部に所属しておりました。決して強くはないクラブでしたが、強化練習や夏の合宿で培った先輩・同輩・後輩という縦横の関係は、このクラブで教わり、大学のクラブでも、社会人になってからもそのことが今も生き続け役立っていると思います。特に、顧問の水谷先生には、授業の「数学」以上に「卓球」の高度な技術や集中力・判断力などの大切さを教わったように

思います。色々ご指導をいただき感謝しております。

また、私たちの頃の主な学校行事と言えば、体育祭・文化祭・水泳大会・球技大会など。夏の「霧ヶ峰キャンプ（1968年7月19日～24日）」は、私だけでなくみんなの思い出にもなっていると思います。自然の雄大さ、とりわけ星の美しさは今でも思い出すことがあります。さらに、冬には「スキー」と、あまり落ち着いて勉強をしたという記憶がないほど色々な行事があったように思います。体育の武田先生・室井先生には、陸上・体操競技など以外に、スキーの素晴らしさを教えていただき、ありがとうございました。

学校行事の中でも、1年生から3年生までを縦割りに、4グループ（4色）に分かれて戦った「体育祭」は、私にとって特別な思い出として記憶に残っています。生徒たち自身で自主的に計画を立て、一致団結し実行するという、『東住吉高校』ならではの伝統行事と思います。毎日、設営や企画などの準備のため、男女・学年を問わず遅くまで残って協力し合ったこと。また、同じ目標を立てた仲間との信頼関係や先輩・後輩との出会いも、私にとって貴重な財産になりました。東住吉高校の自由な校風の中で、素晴らしい先生方にご指導いただき、数多くの仲間と出会い、色々な経験ができました。それらすべてが今の私の礎となっています。本当にありがとうございました。

最後になりましたが、東住吉高校の益々のご発展と、皆様方のご健勝とご多幸を心よりお祈り申し上げます。

## やっぱりクラス

16期生

影山 恵則

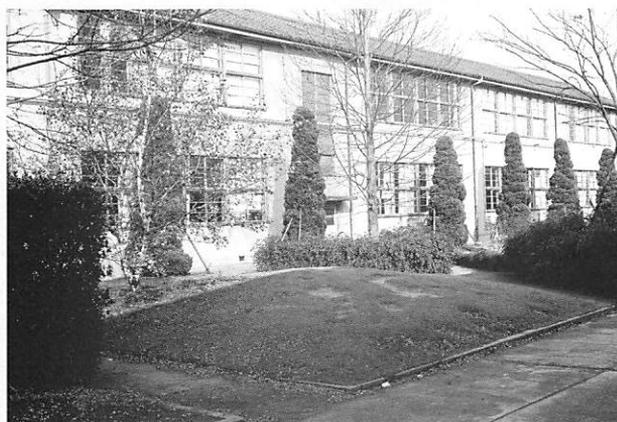
今年2004年は、16期生1年1組のクラス同窓会が開かれる年です。今回は2000年8月、担任であった町淑子先生を東京からお招きして開催しました。しかし、町先生のお元気なお姿を拝見するのは、それが最後となってしまいました。この誌面をお借りして町先生へ哀悼の意を捧げますとともに、あの1年間を思い出すままに綴りたいと思います。

もう30数年も前のことになってしまいました。合格発表の日、少々出遅れた母と私は、南海電車平野線、いわゆるチンチン電車の中野駅から東住吉高校へと急いでいました。途中、すでに発表を見て帰り道の友人が「お前も合格してたで」と一言。何とも感動のないスタートとなってしまいました。

お世辞にもきれいとは言えない下足室—この前には生徒会室があり、昼休みには生徒会の人たちがギターを弾き、生徒が大勢集まって歌ったものでした—のある木造校舎の2階、机と椅子がくっついていて、それがまた木製でとんでもなく重いことに驚かさられながら、そんな教室で1年1組はスタートを切りました。担任は国語科の町淑子先生。お洒落な先生で、年甲斐もなく—当時はそう思ったのですが、今から思えばまだ30歳そこそこだったのです—はいておられたミニスカートが印象に残っています。先生は本当に私達を可愛がってくださり、浜寺公園近くのお宅によくお邪魔したものでした。中には、進級が危ないからと先生のお宅で勉強させられていた友人もいたようですが…

成績と言えば、先生にはクラス一同本当にご迷惑をおかけしました。始業前に全員で、ギターの伴奏に合わせて当時はやっていたフォークソングを歌うなど、よくまとまったクラスだったのですが、とにかく勉強嫌いの多い、というよりそれ以外のところに力を注ぐ人間の多いクラスでした。忘れもしません、2学期の中間考査。返

ってくる試験、返ってくる試験が学年最低の平均点。試験結果が出そろった直後のホームルームの時間、先生は涙を流しながらお説教をされました。純真な私達は、その姿に胸を打たれ、期末考査に向けて懸命に勉強したものでした。高校3年間であの期間が、最も意欲的に、集中して勉強に励んだ期間だと思っているのは私だけでしょうか。



級友の自殺というショッキングな出来事がありました。生きることとは何なのかを考えさせられました。

今では考えられない4泊5日の最終日にしかお風呂に入れないという霧ヶ峰のキャンプでも多くの思い出を作ることができました。

東住吉でなければ体験できない体育祭を初めて経験し、自分たちで作る喜びを知りました。

多くの思い出や場面が頭の中に渦巻いていますが、誌面に制限もありますので、このあたりでペンを置きたいと思います。

最後に、本記念誌に寄稿の機会を与えていただきましたことを心より感謝申し上げます。

# 我が青春の回想記

18期生

合羽 雅彦

東住吉高校創立50周年おめでとうございます。思えば卒業して今年で29年となります。今、自分の子供が高校に入る年代になっていると思うと、月日の速さに驚いています。

入学当時のことを振り返ってみますと、さまざまな思い出が走馬灯のようによみがえってきます。東住吉高校とは「どんな学校かな」と不安と希望を抱きながら学生生活をスタート。そんな時、今は亡き先輩でもある従妹が「心配せんでも、ええ学校やで！自由な校風で楽しいヨ」と言ってくれたのが、昨日の事のように感じます。

入学早々に、制服が自由化されて、うれしくてちょっぴり開放的な気持ちで、私服で登校したこと。霧ヶ峰の教育キャンプでの仲間との楽しい思い出や友との厚い友情が生まれたキャンプファイヤー。少し冗談をして食べられないそばを食べてアレルギーを起こし、先生や先輩を心配させた最終日の宿。

毎年行われる体育祭には、数々の思い出が詰まっています。特に、3年生の時赤組建設団長だったので、一人一人の知恵と汗と努力の結集で、やぐらやマスコットそしてスタンドがひとつひとつ完成していく様に大いに感動をし、感激したものです。1年生から3年生までが一致団結し、ひとつの事を成し遂げた満足感への喜び。そして大成功のうちに体育祭を打ち上げられたことへの感謝。

さらに、高校時代といえば、3年間クラブ活動に没頭した？日々の事が懐かしく思い出されます。きつかった練習の日々の中でも、楽しく過ごしたクラブ。怖かったあの先輩あの先生、やさしかったあの先生あの先輩と、色々と指導して頂きました。また、同期との堅い友情が芽生え、今尚「仲間」として、あのころ同様にワイワイやりながら付き合える人間関係が創られたクラブ活動でもありました。

今、高校時代を振り返ってみて、思う存分に青春を謳歌し、多くの友にも恵まれ、今の自分というものを形成してくれたのは、かく在らん高校時代そのもので、「自主・創造の精神」があったからこそではないかと、つくづく感謝しているしだいです。自由で自主性を重んじる東住吉イズムが、脈々と先輩から後輩へと引き継がれてきた学校を卒業できたこと、それを幸せに思っています。

天国の従妹も、創立50周年を大変喜んでいることでしょう。私も月日の速さに懐かしさを感じる中で、何かしら歴史の重みと誇りを覚えつつ、OB、在校生の皆様の活躍と、母校の益々のご発展をお祈りし、我が青春の回想記を終わります。



## 笑顔で校歌を

19期生

前田 静男



風清し 銀杏の木陰 英知の門に 晴れたり金剛  
 独立夙に誇る 自主の精神 上げわが友 峰の青雲  
 東住吉高等学校

生徒として3年、講師を1年、教諭として13年、計、何と17年間も本当に居心地のよい東住吉“温泉”で過ごさせていただきました。まず学生の頃の思い出を述べさせていただきます。青春ドラマ「おれは男だ」の森田健作にあこがれて1年の夏まで入っていた剣道部。今では考えられない、風向きによっては大変な“ぼっとんトイレ”。夏は木に染み込んだ独特の油の臭い、冬は隙間風の木造校舎。漢文を中国語で朗々と読まれ強烈なインパクトを受けた鶴見先生。いきなり校外で英語の授業をされた奇想天外な発想の田口先生。頭の中を見たくるほど様々な人名、地名、年号が泉のように湧き出てくる世界史の中原先生。今、まさに目の前で本当に事件が起こっているような錯覚をさせていただいた日本史の田中先生。これらの個性あふれる先生方に巡り会えたのも、現在、教職に就いている動機の一つです。

さて、冒頭の校歌ですが、2万人を優に超える卒業生の殆んどの人が私を含めて空で歌える（メロディーは少し間違っている）と思います。というのも、体育祭（今は6月実施）で応援団に入った生徒は本番の1ヶ月以上前から、他の部門の生徒も、大声で歌わされる（？）のですから。昔と比べて、規模は少し小さくなったといっても、府下で最も盛り上がる体育祭の一つだと思います。3年生を中心とした縦割りの団編成は今も昔と同じです。高2の10月に（当時は秋に実施）、真暗になったグラウンドで女子生徒が作ってくれたおにぎりを頬張りながら先輩に手取り足取り教えてもらってスタンドを作っていたことを昨日の事のように覚えています。今後もこの伝統ある“東住吉”の体育祭をずっと続けていって欲しい

いものです。

もう一つ東住吉の名物だったものとして、霧ヶ峰教育キャンプがあると思います。高2の夏に、生まれて初めての級友とのテント泊はなんとも心に残るものとなりました。野外泊は1泊だけでしたが、同じ釜の飯を食い、狭い空間で色々な事を語り合ったこと自体に感動を覚えました。残念ながら28期生ぐらいで、スキー修学旅行に移行されてしまいました。教員になってからは信州山田牧場でのスキー、体験学習を中心としたもの、平和学習を取り入れた沖縄旅行など、色々経験しましたが、矢張り教育キャンプが“1番”だと思います。今、ああいふ形式の修学旅行を実施するのは多方面から考えてかなり難しいかもしれませんが、小規模でも実施できたら生徒にとっては素晴らしい体験になると思います。そういう点で母校で12年間山岳部の顧問をさせてもらい、部員は少ない時もありましたが、色々な景色の素晴らしい山城へ行き部員達とテント泊できたことは、私にとってもこの上ない財産になっています。

ここで再び、また冒頭の校歌に戻りますが、最近は涙なしではなかなか歌えません。母校を離れる数年前から、憲法にも保障されている思想・信条の自由があるにもかかわらず、入学式・卒業式に“国歌斉唱”が入ってきました。校歌斉唱はその直後に入っていました。「自主独立」をたたえている校歌を涙目になりながら思いっきり叫び、自分というものを出すようにしてきました。寄れば大樹の陰ではなく、自分を見失わずに、自主独立の精神を持って生きていきたいものです。教師として、人間として。

最後になりましたが、これからも東住吉高校の益々の発展と皆様のご多幸を祈念いたしまして、私の思い出の記を終わりたいと思います。

# 青春の宝箱東住吉高校

20期生

吉田 清子 (旧姓 佐々木)

母校である東住吉高校が創立50周年という輝かしい半世紀の歴史を刻まれたことを心よりお祝い申し上げます。

私は30年前に東住吉高校の校門をくぐった20期生です。当時の私とはというと、別段取り立てていほどの事もない普通の生徒で、勉強は苦手でしたが、学校で友達と会うのが楽しくて仕方がないという生活を送っていたものでした。



高校生活で思い出す事といえば、私服でもかまわないという自由な校則だったので、他校の高校生に羨ましがられた事。クラブ活動で文化系のギターマンドリン部に3年間所属し、森之宮の青少年会館で行われる文化祭の発表に向けて日々練習に励んだ事。(ちなみに当時はバトン部・バラ組が文化祭の花で大喝采を受けていました。)縦割りによって団分けされ、先輩・後輩としての広く新しい繋がりを得ることが出来た体育祭。クラスメートと寝食ともに過ごした霧ヶ峰キャンプでは、今まで見たこともない無限に続く雄大な風景に次元が変わったかのような錯覚を感じ、都会の喧騒を忘れさせてくれたものでした。

このような当時の色々な思い出は、私の人生において

貴重な宝物として、今も私の胸の中に残っており、望郷のような懐かしさを抱かせてくれる東住吉高校が、すばらしい青春時代を過ごさせてくれたんだと実感しています。

高校時代を思い出すきっかけは、娘が東住吉高校に入学したことでした。20数年ぶりに校門をくぐった入学式の日、バラ園・緑風会館が当時の姿そのままにとどめていたのを見て、当時の思い出が一瞬のうちに甦りました。我が家は、主人がクラブの先輩で十九期生、私は20期生、そして娘は46期生として東住吉高校で青春を謳歌し、‘風きよし、銀杏の木陰…’と口ずさむ先輩・後輩であり、夫婦・親子でもあります。このような家族関係をもてたことが本当に幸せだと感じます。

また、微力ではありましたが、PTA役員をさせていただいたお蔭で体育祭・文化祭などの色々な行事にも参加できました。娘を応援しながら娘の姿に昔の自分を重ね合わせて、20数年ぶりに青春時代を思い出す事ができ、ただのおバサンになりかけていた私にもう一度新鮮な風を吹き起こさせてくれたように思います。

最近の卒業式で‘揚げば尊し’は歌われることは少ないけれど、「師の恩・報恩感謝の心」は古臭いといわずいつの時代にも大事にしていきたいものです。私には、兄貴的存在でもある、当時の2年3組担任の井上先生という恩師がいます。同窓会のたびに出席していただき、クラスの仲間とも近況を報告し合える間柄です。恩師と呼べる先生と、一生付き合える友人に巡り合うことが出来た私は本当に幸せ者です。

在校生の皆さん、青春の宝箱にたくさんの思い出が詰まるように、すばらしい青春時代を送って下さい。卒業生・在校生の皆様のご活躍をお祈りしております。